西刑部西原遺跡（にしおさかべにしはらいせき）
（H区）

平成26年11月

宇都宮市教育委員会

序

西刑部西原遺跡は，宇都宮市の南部インターパーク地内に所在する遺跡です。この周辺には砂田遺跡，杉村遺跡，権現山遺跡，磯岡遺跡，立野遺跡など「東谷・中島地区遺跡群」と呼ばれる大規模な集落跡があり，本遺跡もこの遺跡群の一部であります。また，古代の官道である推定東山道もあり，貴重な遺跡が密集している地域であります。

今回，栃木ダイハツ販売株式会社の店舗建設に先立ち，影響を受けることとなった埋蔵文化財の取扱いについて，事業者と協議いたしました。その結果，遺構保存が行えない部分について，記録保存のための発掘調査を実施しました。調査により，古墳時代後期の住居跡や平安時代の住居跡，溝跡，土坑，柱穴などが確認され，西刑部西原遺跡の他の調査成果とあわせ，遺跡の集落の変遷などを知る上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書は今回の発掘調査で得られたこれらの成果をまとめたものであり，多くの方々にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが，埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査，そして報告書作成・刊行に至るまで，多大なるご協力とご理解をいただきました関係各位，関係機関に対しまして，厚く御礼申し上げます。

平成26年11月

宇都宮市教育委員会
教育長　水　越　久　夫

例　言

1．本書は，栃木県宇都宮市インターパーク４丁目２－６に所在する西刑部西原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，栃木ダイハツ販売株式会社による店舗建設に伴う事前調査として，発掘調査から整理・報告書刊行に至るまで業務を栃木ダイハツ販売株式会社より委託を受けて，宇都宮市教育委員会の指導の下，株式会社東京航業研究所が平成26年度に実施したものである。

3．本報告書の執筆・編集は，宅間清公が行った。ただし，第１章第１節（１）調査に至る経緯は，宇都宮市教育委員会文化課仲沢隼によるものである。

4．調査組織

調査主体者・宇都宮市教育委員会

水越　久夫	教育長		近藤　　真	文化課文化財保護グループ	
檜原　貞亮	教育次長		竹下　　亘	同　上	
赤石澤　亮	文化課長		髙橋　　慧	同　上	
岡地　　宏	文化課長補佐		仲沢　　隼	同　上	
今平　利幸	文化課文化財保護グループ係長				

調査実務者・株式会社東京航業研究所

中本　直士　　代表取締役

宅間　清公　　調査担当者

5．発掘調査，資料整理及び報告書執筆にあたって，下記の諸氏・機関からご指導並びにご協力を賜った。個々にご芳名を記して感謝の意を表したい（敬称略）。

新井ミヤ子　宇塚悦美　加藤清　亀田幸久　小林正三　笹沼駒子　篠原信子　芹澤清八　田代隆
塚本師也　津野仁　長井光彦　水野順敏　栃木ダイハツ販売株式会社　独立行政法人都市再生機構
株式会社酒井建築設計事務所　株式会社コスモ　日産プリンス栃木販売株式会社
晋豊建設株式会社

6．調査に係る図面・写真等の諸記録および出土遺物は，宇都宮市教育委員会が保管している。

凡　例

1．第１図は都市計画図「IX－IE　11－4」を部分複製加筆した。第２図は国土地理院発行２万５千分の１地形図『宇都宮東部』『上三川』を部分複製加筆した。

2．挿図の縮尺は，遺構が１/60，１/30，遺物が土器１/３，１/４，石器２/３である。

3．遺構・遺物実測図中の表示は次のとおりである。

……粘土範囲　……須恵器　……黒色範囲

4．遺物観察表内の（　）は推定値，〔　〕は残存値を表す。

5．遺跡・遺構の略号は以下のとおりである。

西刑部西原遺跡：UT-NS　住居跡：SI　土坑：SK　溝：SD　ピット：P

6．遺構図面上の北の方位は座標北を示す。断面図の水準線は海抜標高を示す。

目　次

序　例言　凡例
1　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
（1）　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
（2）　発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
2　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
（1）　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
（2）　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
3　調査の方法と成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
（1）　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
（2）　層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
（3）　各調査区の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
（4）　遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　本調査範囲と周辺の地形　・・・・・・　2
第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡　・・・・・・・4
第３図　基本層序　・・・・・・・・・・・・・・6
第４図　調査区全体図　・・・・・・・・・・・・7
第５図　第１号住居跡（SI01）及び出土遺物　・・9
第６図　第２号住居跡（SI02）及び出土遺物　・　10
第７図　第３号住居跡（SI03）・・・・・・・・・　11
第８図　第３号住居跡カマド掘方　・・・・・・　11
第９図　第３号住居跡出土遺物　・・・・・・・　12
第10図　第４号住居跡（SI04）・・・・・・・・・　12
第11図　第４号住居跡袖部　・・・・・・・・・　13
第12図　第４号住居跡遺物出土状況　・・・・・　13
第13図　第４号住居跡出土遺物　・・・・・・・・　14
第14図　第５号住居跡（SI05）及び出土遺物　・　15
第15図　第１号溝跡　・・・・・・・・・・・・・　16
第16図　第２号溝跡　・・・・・・・・・・・・・　16
第17図　第３号溝跡　・・・・・・・・・・・・・　16
第18図　第４号溝跡　・・・・・・・・・・・・・　17
第19図　第１号土坑　・・・・・・・・・・・・・　17
第20図　ピット配置図（第１・２調査区）・・・　18
第21図　ピット配置図（第３調査区）・・・・・　19
第22図　ピット配置図（第４調査区）・・・・・　19
第23図　ピット　・・・・・・・・・・・・・・・　20
第24図　ピット出土遺物　・・・・・・・・・・・　21
第25図　遺構外出土遺物　・・・・・・・・・・・　21

表 目 次

第１表　ピット計測表・・・・・・・・・・・・・　21
第２表　出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・　21

図 版 目 次

図版１　第１調査区全景（南より）　第２調査区全景（南より）
図版２　第３調査区南北トレンチ全景（南より）　第３調査区東西トレンチ全景（東より）　第４調査区全景（南より）
図版３　SI01 全景（南より）　SI02 全景（南東より）　SI02 貯蔵穴完掘（南より）　SI02 貯蔵穴遺物出土状況（南より）　SI02 貯蔵穴遺物出土状況（南より）　SI03 全景（南より）　SI03 カマド左袖出土土器（南より）　SI04 全景（南より）
図版４　SI04 遺物出土状況（南より）　SI05 全景（西より）　SD01 完掘（南東より）　SD02 全景（東より）　SD03 全景（東より）　SD04 全景（南より）
図版５　SI01-No.2　SI02-No.2　SI02-No.3　SI03-No.4　SI03-No.6　SI04-No.1　SI04-No.3
図版６　SI04-No.5　SI01-No.1　SI02-No.1　SI03-No.1　SI03-No.2　SI03-No.3　SI03-No.5　SI04-No.2　SI04-No.4　SI05-No.1　SI05-No.2　SI05-No.3　P18-No.1　P21-No.2　遺構外-No.1

1　はじめに

（1）　調査に至る経緯

平成26年4月25日付で，栃木ダイハツ販売株式会社　代表取締役社長　大原博之より宇都宮市インターパーク4丁目2－6の西刑部西原遺跡（県番号4354）内での店舗および自動車修理工場建設に伴う，文化財保護法第93条の申請が提出された。5月1日付で市教育委員会から県教育委員会へ進達し，これに対し県教育委員会より確認調査が必要である旨の指示が5月13日付であったため，事業者代理人であった株式会社酒井建築設計事務所を通じて事業者と協議し，確認調査を実施した。

確認調査は，6月10日から13日まで実施した。調査の方法は，建築物等の建築が予定されている場所に，6本（うち2本が十字状に交差する）のトレンチを設定し，遺構の有無を確認した。

調査の結果，竪穴住居跡4軒のほか，溝跡，多数の土坑・柱穴等を確認し，遺物としては，土師器片，須恵器片が出土した。

その後，この調査結果を踏まえ，事業者および土地所有者である栃木ダイハツ販売株式会社と協議した結果，工法等の事業計画の変更は難しいとの結論に至ったため，記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

調査の実務については，事業者および土地所有者である栃木ダイハツ販売株式会社の調査依頼のもと，土地造成・分譲を行った独立行政法人都市再生機構が費用を負担し，宇都宮市教育委員会が調査主体として事務処理を行い，株式会社東京航業研究所が現地における発掘調査および発掘調査報告書の作成を担当することとなった。

（2）　発掘調査の経過

発掘調査は平成26年8月5日から8月25日まで行った。

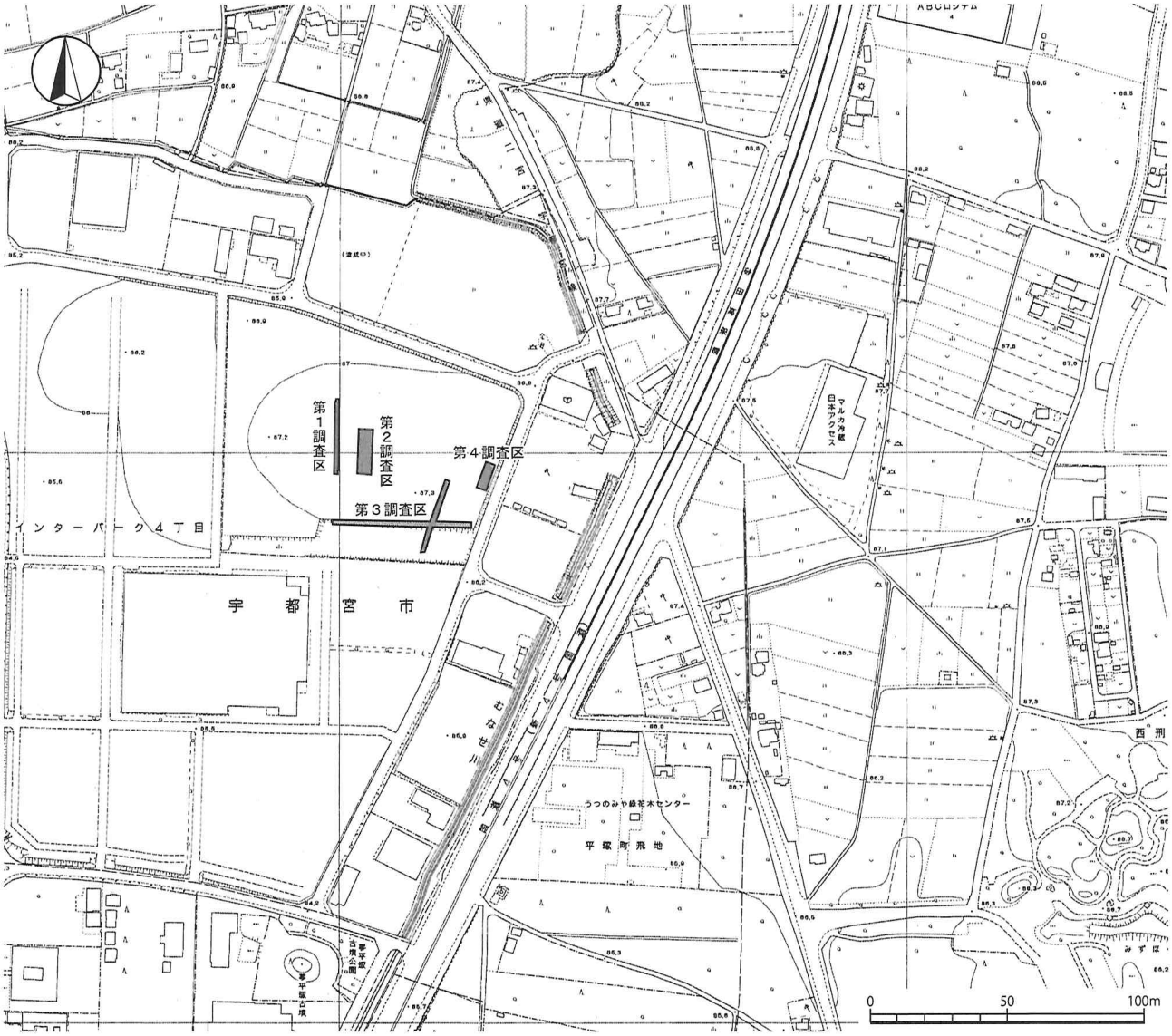
8月5日に第2調査区東側及び第4調査区西側を重機により拡張を行った。平行して，発掘機材の搬入，仮設トイレの設置を行った。同日午後より人力で遺構確認を行なった。また，6･8日に基準点測量を行った。

6日より第1・2調査区から遺構の調査に着手し，適宜，撮影・図面作成等を行った。18日以降は第3・4調査区へ順次調査に着手した。22日までに各調査区の遺構調査を終了し，調査区毎に全景撮影を行った。25日に宇都宮市教育委員会より終了確認を行った。同日発掘機材及び仮設トイレを撤収し，全ての作業を終了した。

2　遺跡の位置と環境

（1）　地理的環境

西刑部西原遺跡は，宇都宮市東南部，JR宇都宮駅から南東へ約7.5ｋｍ，北関東自動車道上三川ＩＣの北約1.3ｋｍに位置している。栃木県の地勢を見ると北西部に位置する日光山塊や北東部に位置する八溝山塊に端を発する河川が県中央部から南半部にかけて南流している。また，これらの河川の浸食により南北に長い河岸段丘が発達している。鬼怒川中流域両岸では何段かのそれが確認でき，上位の宝積寺台地，中位の宝木台地，低位の田原台地と呼称されている。これらのうち田原台地では鹿沼軽石層の堆積は見られないことから，その下限が3.2万年前をさかのぼることはない。中位から上位の台地は鹿沼軽石層を確認でき，こ



第１図　本調査範囲と周辺の地形

れらの台地の形成の古さを物語っている。

本遺跡は，日光山塊に端を発する鬼怒川と田川にはさまれた岡本・磯岡台地上に位置している。岡本・磯岡台地は宝木台地相当の中位段丘で，西側で低位段丘である田原台地と接し，東側は鬼怒川低地を臨む。遺跡はこの岡本・磯岡台地の南東部の段丘面上の平坦部に立地し，西側およそ0.9ｋｍが田原台地との崖線になる。標高は87ｍ程である。

周辺は，かつては田畑や山林が広がっていたが，国道４号線バイパスや北関東自動車道上三川ＩＣの建設やそれに付随したインターパークの開発事業によりその様子を大きく変えている。またこれらの事業に伴い多くの遺跡が調査された場所でもある。

（２）　歴史的環境

西刑部西原遺跡周辺では北関東自動車道，４号線バイパス，インターパーク建設に先立ち数多くの遺跡が発掘調査されている。大規模な面積を発掘したものが多く，他時期にわたる遺跡も多い。以下，時代ごとにその概要を述べることにする。

旧石器時代

田原台地（低位段丘）に位置する磯岡北遺跡（52）・磯岡遺跡（51）・砂田遺跡（24）から少数の製品・未製品・剥片等が出土している。また，権現山遺跡（45）では石器集中区が２箇所調査され，ナイフ型石器や剥片が出土している。西赤堀遺跡（50）では，石器集中区が６箇所調査され，尖頭器・スクレーパー・グレイバーが出土した。

縄文時代

草創期から前期にかけては遺物のみ或いは陥穴･土坑などが少数調査されている。その中で杉村遺跡（43）では，早期撚糸文系土器後半の可能性のある竪穴状遺構と楕円形の浅い土坑が調査されている。同遺跡では早期の遺物として，撚糸文系土器・沈線文系土器・条痕文系土器が出土している。そのほか砂田遺跡・立野遺跡（35）・磯岡遺跡で土器が出土している。また，遺物は出土していなが，西刑部西原遺跡をはじめ，覆土中に今市・七本桜軽石を含む落し穴と思われる遺構が検出されている。

中期では，磯岡遺跡・磯岡北遺跡でそれぞれ阿玉台期の住居跡が１軒，中島笹塚遺跡（32）で加曽利ＥⅠ期の住居跡が１軒，立野遺跡で土坑が見つかっている。地形的な制約からであろうか，東谷・中島地区では大規模集落はないと思われる。大規模な遺跡は地図外になるが，岡本・磯岡台地の南東部の鬼怒川台地を臨む島田遺跡で阿玉台Ⅰｂ～加曽利ＥⅡ式の集落が営まれている。

後期～晩期にかけても周辺では大きな遺跡は見られず，後期の遺構は西赤堀遺跡で称名寺式期の住居跡が，立野遺跡で堀之内１式の土坑が見つかっている。晩期では権現山遺跡で大洞Ｃ２式期の住居跡が１軒調査されているという。その他は，遺物が出土しているに過ぎない。

弥生時代

前期は権現山遺跡で変形工字文を描く甕が，百目鬼遺跡（58）でも前期末から中期初頭に比定される土器が出土している。

中期では，後半になると遺物・遺構が増えてくる。磯岡北遺跡で中期後半の住居跡および土坑が調査されている。特に第３号土坑からは御新田段階から上山段階の土器に伴って福島県地方に故地をもつ二本同時施文具による渦巻き文を描く土器が出土している。広域編年を考える上で貴重な共伴事例である。立野遺跡でも遺物は少ないが中期後半の土坑が検出されている。権現山遺跡では中葉から後半にかけての資料が遺構には伴わないがややまとまって出土している。

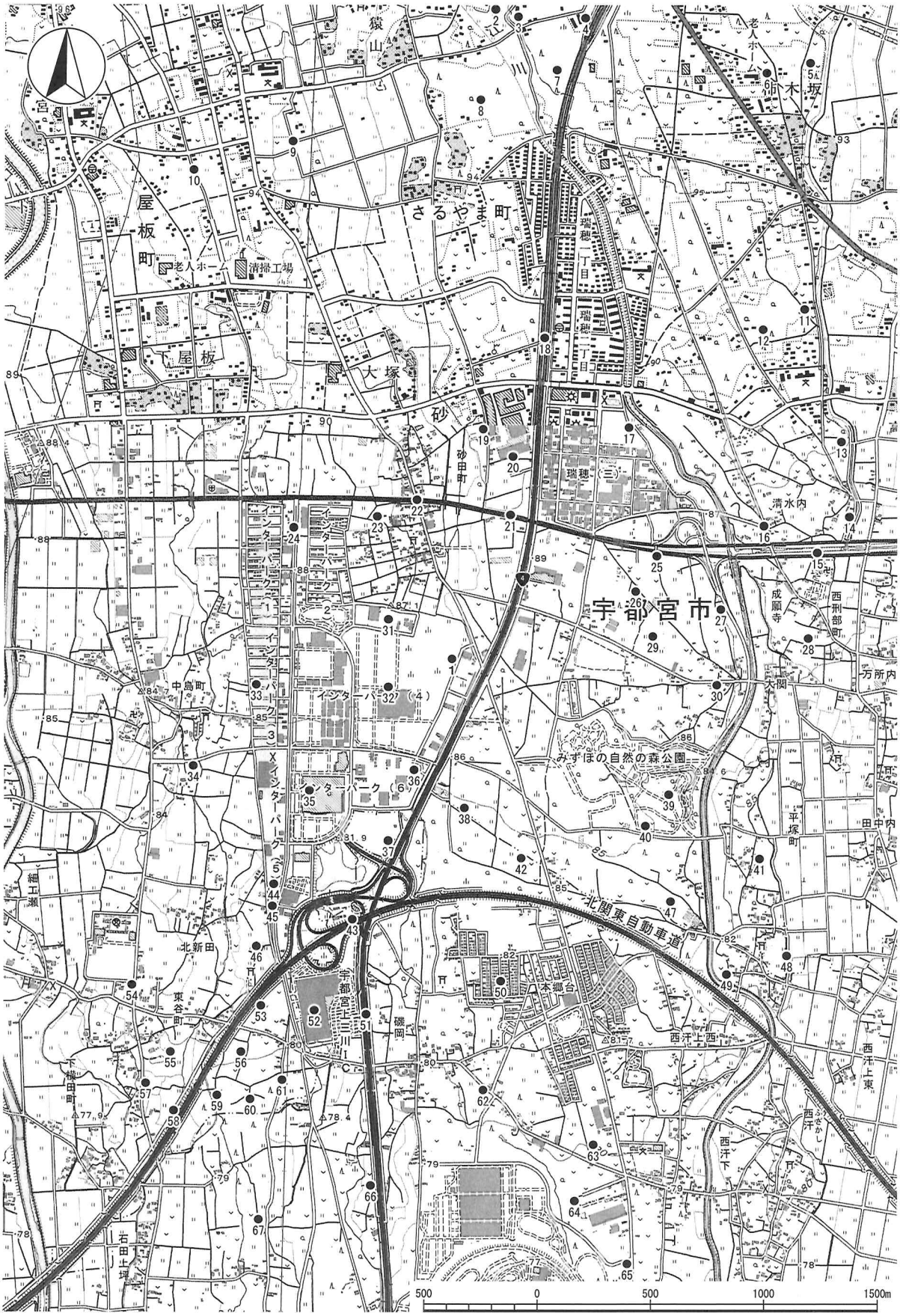
後期では，二軒屋式の住居跡が２軒見つかっている瑞穂野団地遺跡（17）や，杉村遺跡で二軒屋式期の浅い皿状の土坑が１基検出されている。また，権現山遺跡ではアメリカ式石鏃が出土している。

古墳時代

古墳時代になると集落・古墳共に数多く営まれることになる。ただし，その萌芽は中期以降であり，前期に相当する遺跡は少ない。前期の遺跡は，砂田姥沼遺跡（31）・砂田東遺跡（22）・立野遺跡で少数の竪穴住居が知られている。杉村遺跡では前期末の住居跡から管玉が出土している。

中期になると大規模な集落が営まれる。成願寺遺跡（15）・砂田遺跡・砂田東遺跡・立野遺跡・杉村遺跡・磯岡遺跡・権現山遺跡など，広範囲にわたり多数の遺跡が見つかっている。また，規模の大きな集落が営まれるのも特徴的である。中期後半～後期初頭の杉村遺跡では住居の中央付近にカマドが築かれる，所謂初期カマドをもつ住居が存在する。権現山遺跡・百目鬼遺跡では，中期から後期にかけて，地点を変え継続的に集落が営まれている。また，在地の土器に伴いＴＫ 208・23・47 型式に平行する須恵器が出土している。住居跡から出土したＴＫ 208 並行型式の須恵器は榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）の下層から出土し，地域間の土器の並行関係や実年代を考える上で大きな指標となる。中期の集落では権現山遺跡で石製模造品が多数見つかっている。

集落遺跡の増加とともに古墳も多数築かれるようになる。中期の古墳としては５世紀第３四半期頃と思われる笹塚古墳（55）がある。全長約 100 ｍの前方後円墳で同時期の県内最大規模の古墳である。また，笹塚



第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡

1	**西刑部西原遺跡**	15	成願寺遺跡	29	中道遺跡	42	内野遺跡	55	笹塚古墳
2	大久保台山遺跡	16	藤腰遺跡	30	後尚塚遺跡	43	杉村・磯岡北・杉村北遺跡	56	原古墳群
3	天王山遺跡	17	瑞穂野団地遺跡	31	砂田姥沼遺跡	44	桜稲荷古墳	57	鶴舞塚古墳
4	猿山東原遺跡	18	猿山遺跡	32	中島笹塚遺跡	45	権現山遺跡	58	百目鬼遺跡
5	柿木坂遺跡	19	下桑島西原古墳群	33	赤沢高塚群	46	権現山遺跡	59	松の塚古墳
6	西原庚申塚	20	南原古墳	34	芋内遺跡	47	下小屋原遺跡	60	権現塚古墳群
7	東原古墳群	21	上横田Ａ遺跡	35	立野遺跡	48	南浦遺跡	61	車塚古墳群
8	さるやま城古墳群	22	砂田東遺跡	36	琴平塚古墳群	49	高島館跡	62	磯岡・西汗古墳群
9	菅谷遺跡	23	砂田滝遺跡	37	杉村（東谷・中島地区）遺跡	50	西赤堀遺跡	63	西赤堀東遺跡
10	赤沢遺跡	24	砂田遺跡	38	西沼遺跡	51	磯岡遺跡	64	狐塚古墳（磯岡・西汗２号墳）
11	根本西台古墳群	25	大関台遺跡	39	古屋原高塚群	52	磯岡北遺跡	65	西赤堀南遺跡
12	桑島台古墳群	26	大関高塚群	40	不動堂遺跡	53	原遺跡	66	磯岡Ｂ遺跡
13	飯塚古墳	27	小屋原遺跡	41	平塚原根岸遺跡	54	双子塚古墳	67	上石田遺跡
14	成願寺北遺跡	28	榎戸遺跡						

古墳より若干後出すると思われる鶴舞塚古墳（57）が築かれる。

後期の古墳としては，墳長52ｍの前方後円墳で二重周溝をもつ６世紀初頭の琴平塚古墳（36），円墳である松の塚古墳（59），６世紀後半の帆立貝形前方後円墳である狐塚古墳（磯岡・西汗２号墳）（64），前方後円墳である飯塚古墳（13），下桑島西原古墳群（19），磯岡・西汗古墳群（62）がある。また，詳細は不明であるが，東原古墳群（7）で前方後円墳が２基，さるやま城古墳群（8）で前方後円墳が２基を含む古墳が存在する。

権現山遺跡では，Ａ区の北側低地部の東側で居館跡が見つかっている。全体の規模は不明であるが，居館を囲む溝跡が検出され，一辺約100ｍほどである。溝の内側には柵列が回り，溝と軸方向を同じくする掘立柱建物跡も検出されている。時期は５世紀後葉とされ，報告書では，同居館の主の奥津城として鶴舞塚古墳あるいは松の塚古墳が挙げられている。

古代

大規模な集落として猿山遺跡（18）・砂田遺跡・大関台遺跡（25）・瑞穂野団地遺跡が挙げられる。磯岡遺跡では漆紙文書が見つかっている。

また，このことに関連して，古代の東山道と想定され道路跡が，権現山遺跡・杉村遺跡・杉村北遺跡・磯岡北遺跡で見つかっている。道路の両端に側溝を持つもので東北－南西方位に直線的に見つかっている。側溝の土層の観察から，何回の溝の掘り直しが認められ，道路の補修等が行われている。

中世

鎌倉時代から室町時代にかけて本遺跡周辺地域は宇都宮氏および芳賀氏の支配地域とされている。同時期の城郭としてさるやま城跡・高島館跡（49）が知られている。

3　調査の方法と成果

（1）　調査の方法

第２調査区・第４調査区の一部を重機により拡張し，その後調査区毎に測量用の基準杭を設定した。遺構確認を行なった後に，土層観察用ベルトを設定し，遺構の調査を行なった。遺構内から出土した遺物は，覆土中の小片に関しては遺構毎に一括で取り上げ，床面やカマド出土遺物などに関してはその出土位置の記録及び撮影を行った。また，遺物がまとまって出土した箇所で適宜出土状況図（微細図）を作成した。

平面図及び断面図は，縮尺１：20 で手取りした。写真は遺構毎に適宜撮影し，完掘後調査区毎にも撮影した。写真は 35 ㎜モノクロ・リバーサルフィルム及びデジタルカメラで撮影した。

（2）　層序

今回の調査は調査区が４箇所に分かれ，それぞれの調査区でその遺存状況は異なっていた。多くの区では表土（攪乱層）が確認面深くにまで及んでいるため，ローム層までの土層の堆積層序は，部分的に確認できるに過ぎない。そのため，ここでは模式的にその層序を記した。

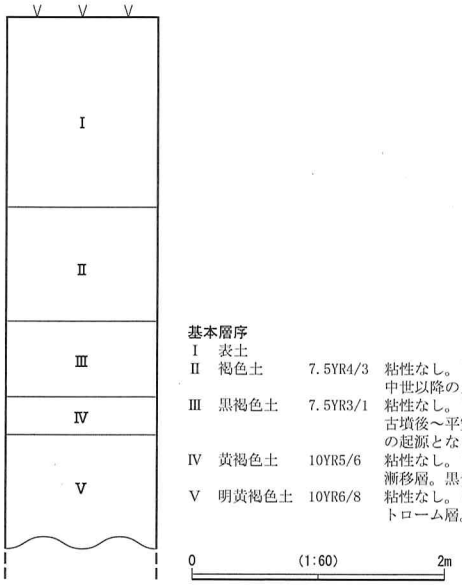
第Ⅰ層は表土（攪乱）層である。砂利などを含む整地層と耕作土からなる。深さは第１調査区で 1.5 ～ 1.6 ｍと深く，東側の第３・４調査区では 0.7 ～ 0.8 ｍであった。また，第１調査区では下端に水平に鉄分沈着層が認められることから近年まで水田があったと思われる。

第Ⅱ層は，第２･３調査区の一部で認められた層である。第２･３住居跡の覆土の上部に見られることから，中世以降に堆積したものと思われる。層厚は 0.3 ｍ前後である。

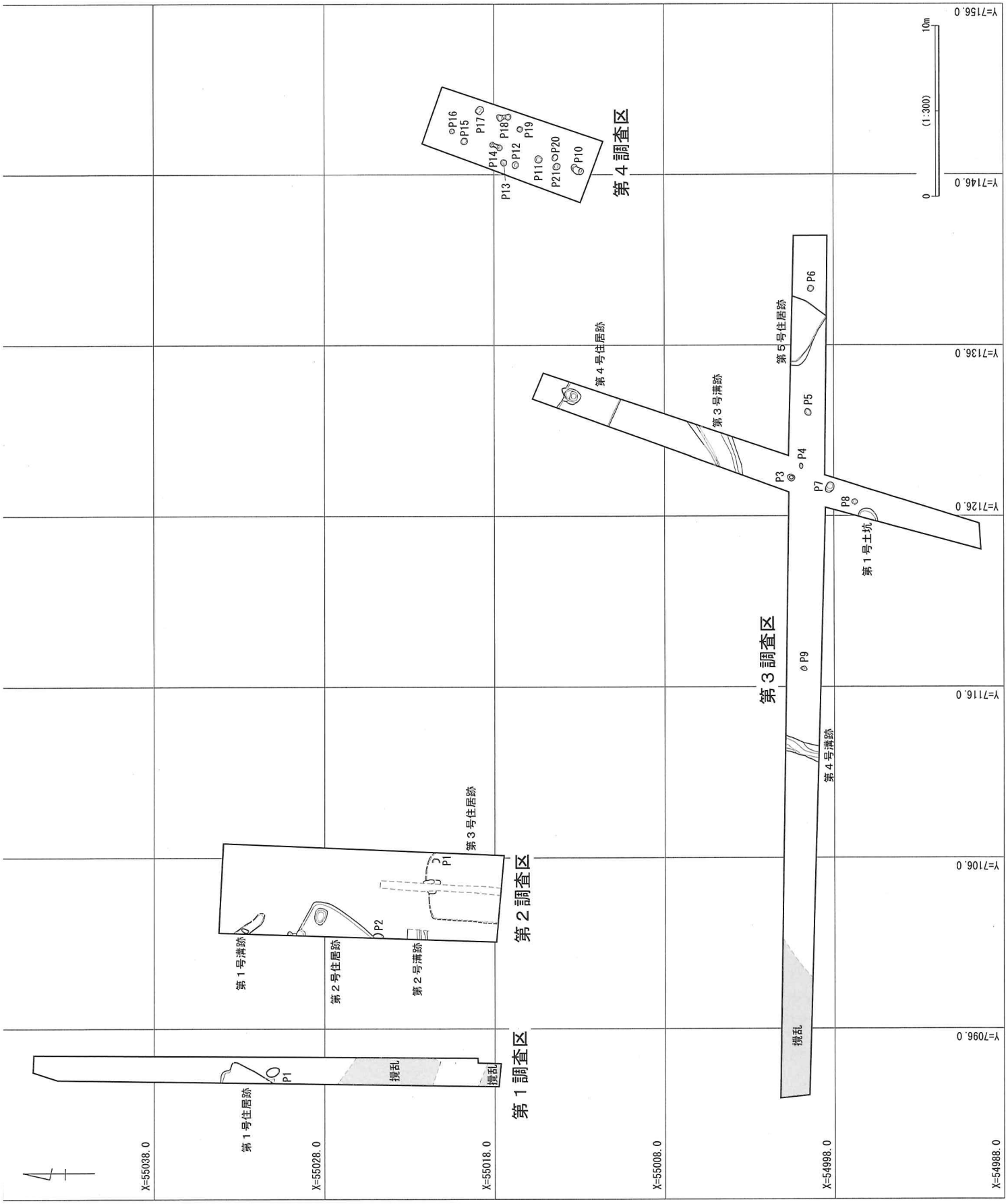
第Ⅲ層は第２・３調査区で認められた層である。今回調査した遺構の覆土の起源をなす層である。第２住居跡は同層を切り込んで構築されていることから，古墳時代後期には堆積していたと思われる。ここでは古墳時代～平安時代の層と捉えておきたい。

第Ⅳ層は，第３調査区の一部で認められた層である。黒褐色土とローム層の漸移層である。第２調査区では黒褐色土（第Ⅲ層）とローム層（第Ⅴ層）の間の分層は明確であり，第Ⅳ層を介していなかった。これが人為的なことか否かは不明である。

第Ⅴ層は，ソフトローム層である。一部でハード化した部分も見受けられた。今市・七本桜スコリアはあまり明確ではなかった。



第３図　基本層序


第１調査区
第２調査区
第３調査区
第４調査区
第１号住居跡
第１号溝跡
第２号住居跡
第２号溝跡
第３号住居跡
第４号住居跡
第３号溝跡
第５号住居跡
第４号溝跡
第１号土坑
撹乱
撹乱
撹乱
P1
P2
P1
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
X=55038.0
X=55028.0
X=55018.0
X=55008.0
X=54998.0
X=54988.0
Y=7096.0
Y=7106.0
Y=7116.0
Y=7126.0
Y=7136.0
Y=7146.0
Y=7156.0
0
(1:300)
10m

第４図　調査区全体図

（3） 各調査区の概要

今回の調査は，４つの調査区に分けて行った。以下，調査区ごとに概要を記すこととする。

第１調査区（第４図）

４つの調査区のうち最も西側に位置する調査区で，南北約 27.5 m，東西約 1.8 mのトレンチ状を呈する。遺構確認面は，ローム土中であり，他の調査区に比べ深く，地表下約 1.8 mほどである。確認面直上近くまで攪乱されているところが多い。また，一部に鉄分が沈着した層が水平に堆積していたので，かつて水田が営まれていたと思われる。攪乱及び水田造成により，ソフトロームが部分的に乱されている。住居跡１軒とピット１基を調査した。

第２調査区（第４図）

第１調査区の東側に位置する。南北約 16.5 m，東西約 5.4 mの長方形を呈する。確認面は漸移層からソフトローム上面で，深さは現地表面から 1.2 ～ 1.4 mほどである。調査区は全体にトレンチャーによる攪乱が南北に走っており，遺構の残りは良好ではない。住居跡２軒，溝跡２条，ピット１基を調査した。

第３調査区（第４図）

調査対象地の南側に位置する。略十字状を呈する調査区である。南北約 26.4 m，東西約 50.5 mである。多くの場所で遺構確認面付近にまで攪乱および耕作面が及んでいた。一部東西トレンチ東側（第５号住居跡付近）で第Ⅲ層以下の自然堆積層が見られた。確認面の高さは現地表面から 0.8 mほどである。

住居跡２軒，溝跡２条，土坑１基，ピット７基を調査した。

第４調査区（第４図）

調査対象地の東端に位置する調査区で，南北 10.0 m，東西 3.8 mの長方形を呈する。確認面の高さは現地表面から 0.8 mほどである。他の調査区のようなトレンチャーによる攪乱は見られなかったが，耕作面が漸移層まで及んでいるため，自然堆積層は確認できなかった。ピット 12 基を調査した。

（4） 遺構と遺物

今回の調査では，竪穴住居跡５軒，溝跡４条，土坑１基，ピット 21 基を調査した。竪穴住居跡は古墳時代後期に属するものが３軒，平安時代のものが２軒である。何れもカマドを持つもとと思われるが，実際にカマドを確実に確認できたのは第２～４号住居跡の３軒で，北壁に敷設されている。

溝跡は出土遺物がほぼ認められず，細かな時期は不明である。しかし，覆土が基本層序の第Ⅲ層を起源とすることや，第２号溝跡のように溝埋没後に第Ⅱ層の堆積がみられることから概ね，中世以前と考えられる。また，第１～３号溝跡は第Ⅲ層をきって掘削されている様子が見られることから，第Ⅲ層の堆積の後半で築かれたもの即ち，平安時代の所産と考えられる。

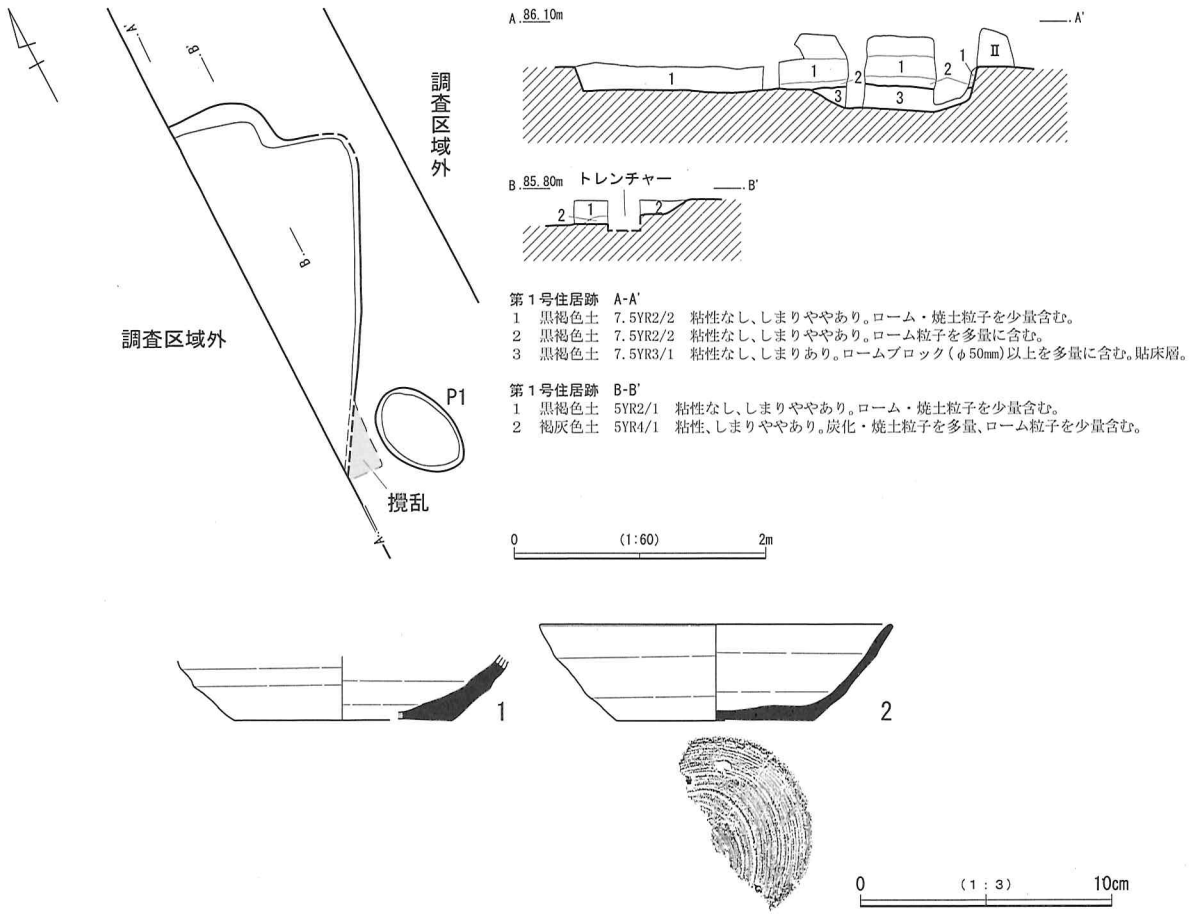
土坑及びピットも同様に平安時代のものであろう。

遺物は 27 ℓ テンバコで１箱分出土した。

１．住居跡

第１号住居跡（第５図）

第１調査区中央やや北側に位置する。住居跡の北東隅付近を中心に全体の約 20 ～ 25％を検出したに過ぎ



第５図　第１号住居跡（SI01）及び出土遺物

ず，大半は調査区外である。壁はほぼ垂直に立ち上がり，深さは0.2 mである。住居北壁が東側隅付近で北側に多少突出していた。同部分の立ち上がりはやや緩やかであった。突出部では，焼土がややまとまって検出されたので，カマドの可能性を想定して調査した。結果，粘土等は伴わず，狭い範囲に焼土が見られるだけであったので，カマドではないと判断した。住居廃絶時にカマドを壊したものの一部の可能性があるが，カマド本体は調査区外にあるため詳らかにできない。

住居床面はトレンチャーにより激しく撹乱されていたが，概ね平坦である。硬化面は認められなかった。壁溝・柱穴は検出されなかった。

出土遺物は覆土中より，須恵器の坏が出土した。９世紀後半の住居跡である。

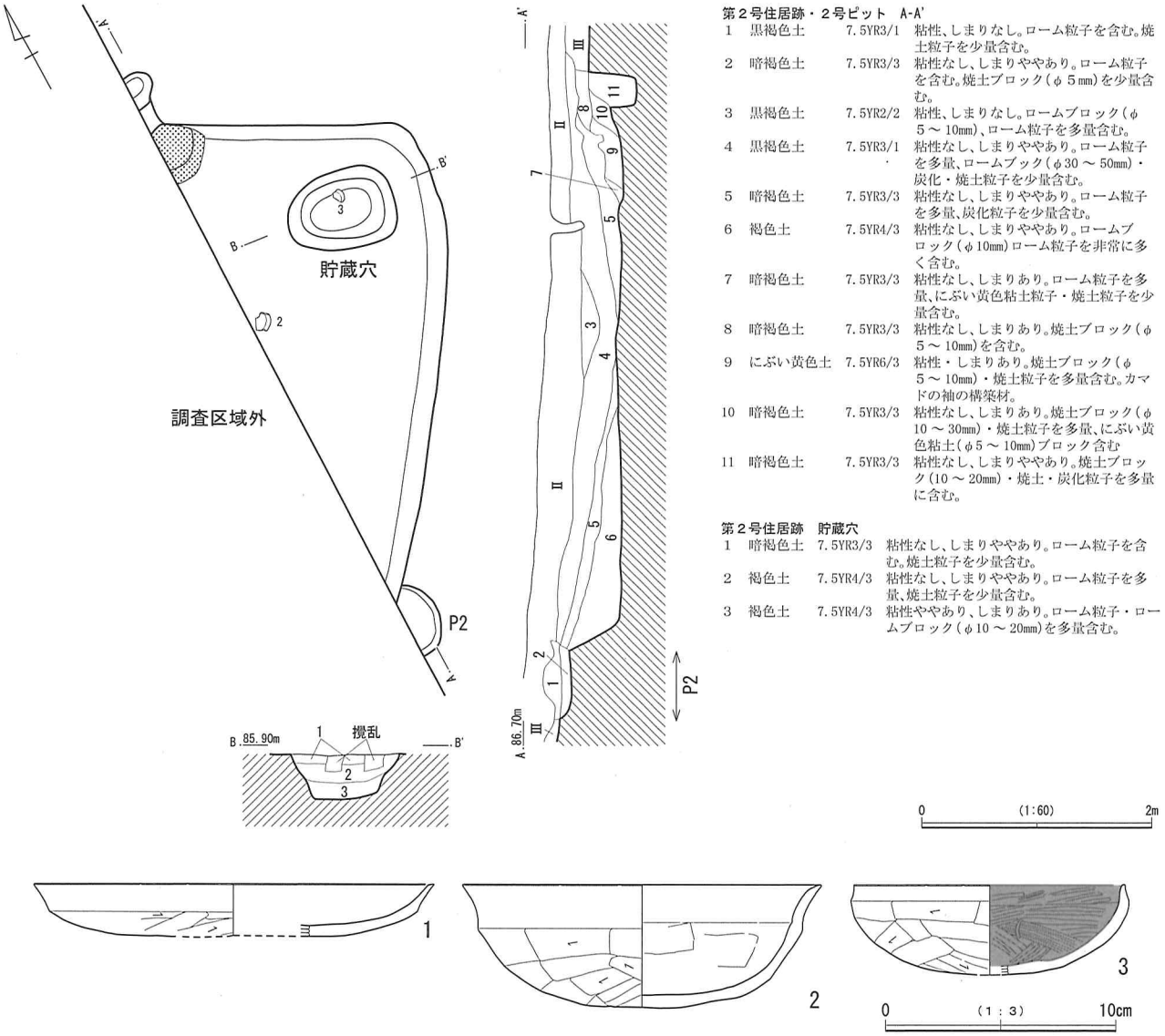
第２号住居跡（第６図）

第２調査区の西側で検出された。全体の40％ほど調査できた。長軸4.2 m，短軸2.6 m，住居南東部分で第２号ピットと重複するが，第２号ピットより古い。覆土はレンズ状の堆積をなすことから自然堆積である。確認面からの深さは0.5 mほどで床面は平坦である。壁は，直線的にやや斜めに立ち上がる。住居の隅はやや丸味を帯びるものと思われる。

カマドは，北壁に付設されていたが，右袖及び煙道部の一部を検出したのみで，燃焼部は調査区域外に位置している。カマドは黄色粘土を構築材とし，若干の焼土粒子を含んでいる。調査区際で堆積状況を確認したが，焼土の纏まりは確認できなかったことからも，燃焼部はさらに西側に位置しているものと思われる。

北東隅付近で貯蔵穴が検出された。長軸0.95 m，短軸0.69 m，深さ0.38 mで底面はやや丸味を帯びていた。

遺物は，覆土中より破片が，底面及び貯蔵穴の覆土中からは，やや大きめの坏が出土している。これらの



第６図　第２号住居跡（SI02）及び出土遺物

土器より，古墳時代後期の所産と思われる。

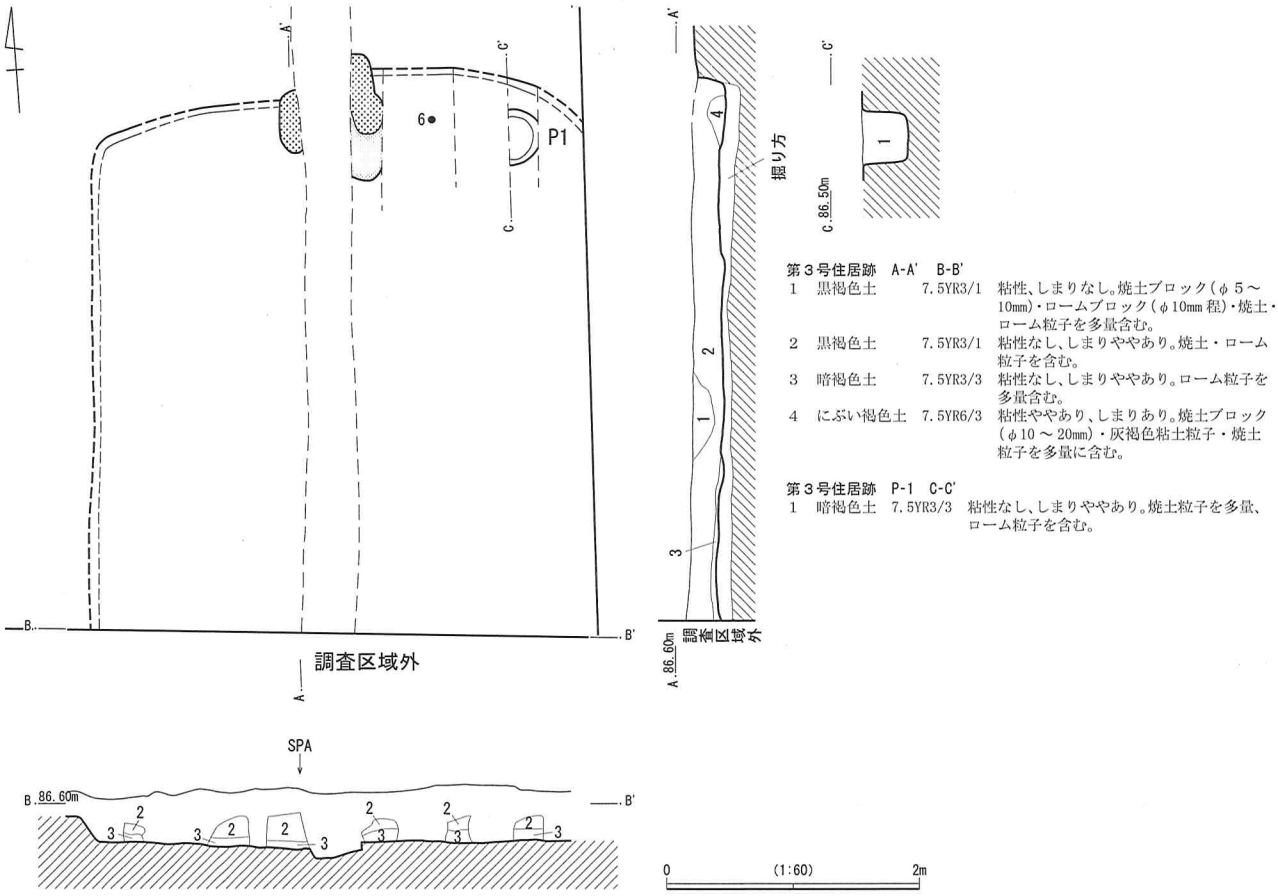
第３号住居跡（第７～９図）

第２調査区南端に位置する。南北方向に走るトレンチャーにより等間隔に床面下まで撹乱されていた。住居跡の東壁と南壁は調査区域外に位置するものと思われる。西壁は撹乱され確認できなかった。南北 4.5 m 以上，東西 3.9 m 以上，深さは 0.3 m で，主軸方位はほぼ北である。撹乱により詳細を欠くが，住居隅はやや丸みを帯びるようである。壁は浅いが垂直に近く直線状に立ち上がる。床面は，あまり硬化していない。床面からは，焼土粒子が検出された。焼失住居の可能性も考慮したが，炭化物の集中は認められなかった。焼土はカマド付近が特に多く，粘土粒子も認められた。

カマドは北壁中央付近に付設されている。中心部分をトレンチャーにより撹乱されていた。袖は，その痕跡を確認できるに過ぎない。恐らく住居廃絶時にカマドは壊されたと考えられる。また，カマド左袖の堀方中からは土師器の坏（第９図４）が逆位で出土した。

柱穴と考えられるピットは検出できなかった。住居跡北東隅で検出されたＰ-１は，その平面的な位置から，やや小さいが，柱穴ではなく貯蔵穴であろう。

遺物は，前述の坏以外に，甕（第９図６）がカマドの東側から出土している。その他は，覆土中より出土している。古墳時代後期の所産である。



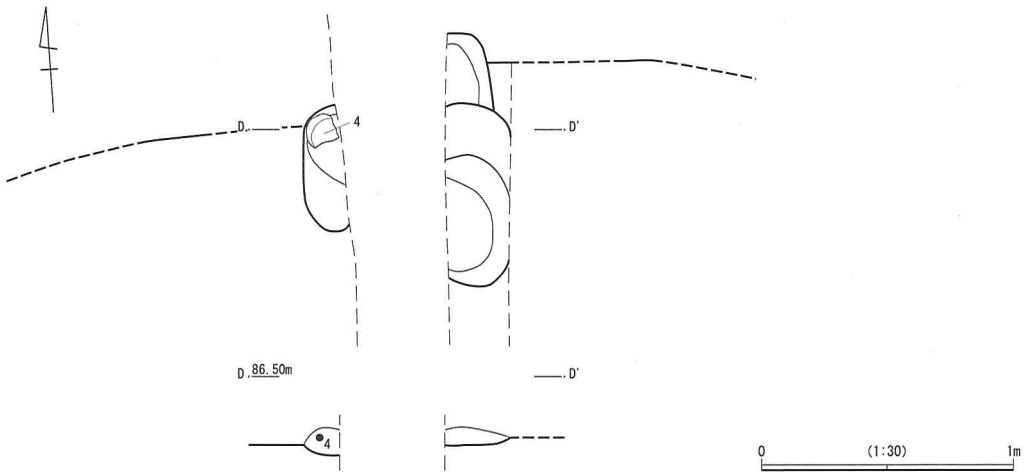
第３号住居跡　A-A'　B-B'

1	黒褐色土	7.5YR3/1	粘性、しまりなし。焼土ブロック（φ５～10mm）・ロームブロック（φ10mm程）・焼土・ローム粒子を多量含む。
2	黒褐色土	7.5YR3/1	粘性なし、しまりややあり。焼土・ローム粒子を含む。
3	暗褐色土	7.5YR3/3	粘性なし、しまりややあり。ローム粒子を多量含む。
4	にぶい褐色土	7.5YR6/3	粘性ややあり、しまりあり。焼土ブロック（φ10～20mm）・灰褐色粘土粒子・焼土粒子を多量に含む。

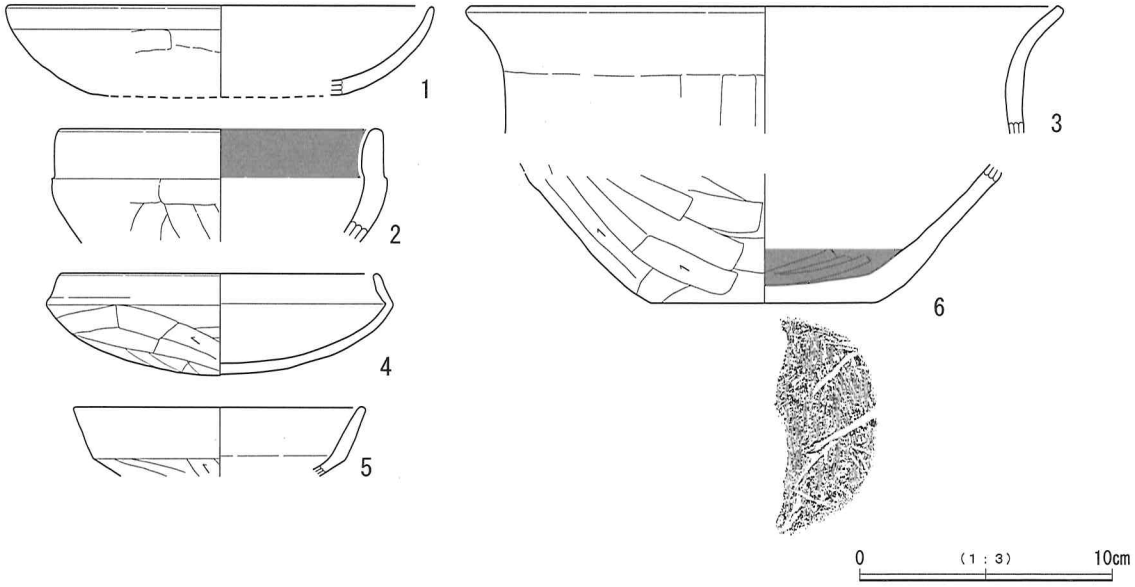
第３号住居跡　P-1　C-C'

1	暗褐色土	7.5YR3/3	粘性なし、しまりややあり。焼土粒子を多量、ローム粒子を含む。

第７図　第３号住居跡（SI03）



第８図　第３号住居跡カマド掘方



第９図　第３号住居跡出土遺物

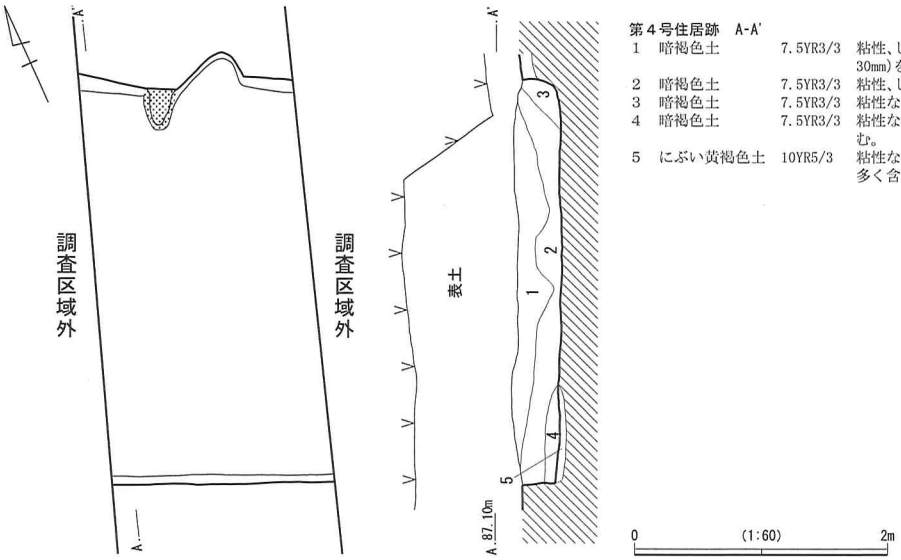
第４号住居跡（第 10 ～ 13 図）

第３調査区北端に位置する。東西壁は調査区域外に位置する。南北の壁は確認できた。南北 3.4 m以上，東西 3.2 m，深さは 1.4 mで，主軸方位はN － 25° －Eである。床面は軟質であり，やや凹凸が認められた。壁は南側ではほぼ垂直に直線的に立ち上がるが，北壁西側付近ではやや丸味を持って立ち上がる。

北壁にカマドが付設されている。北壁に対してやや西側にふれるように築かれている。天井部及び右袖は既に壊されていた。B - B' ラインでも天井の崩落土は確認できないことから，住居跡廃絶時に取り壊されたと思われる。左袖は若干遺存しており，内側が被熱により赤化していた。カマドの北の立ち上がりは，堀方のラインと角度を変えず，立ち上がる。このため，廃絶時に壊されたり，その後の埋没過程で壁が崩れたりした可能性は低い。よって，この立ち上がりはカマドの煙道部の立ち上がりと考えられる。

カマドの堀方は左袖の下にも及び，カマドの前面を大きく掘り込んでいる。

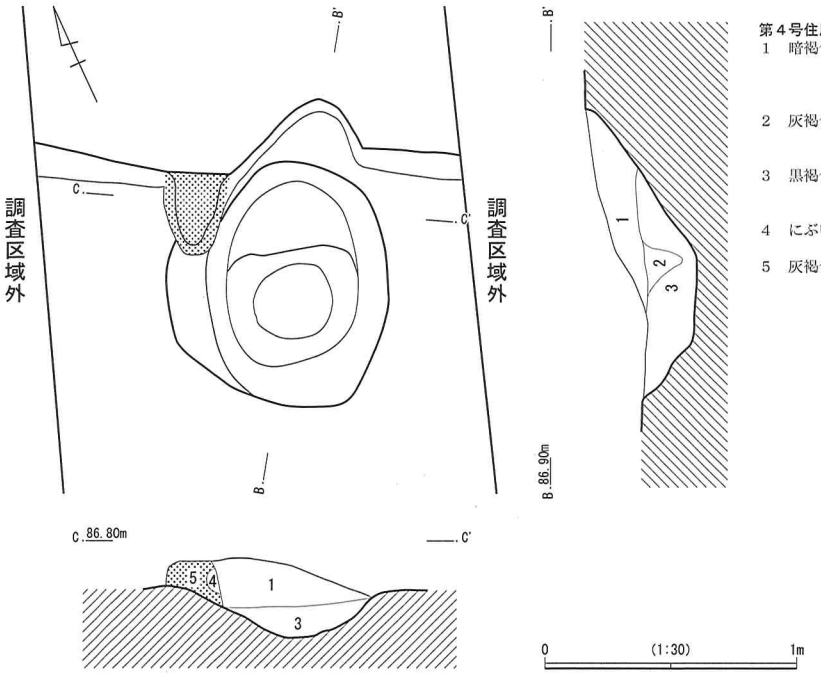
遺物は，カマド周辺から多量に出土した。3 は図示していないが，カマド周辺で出土したものである。胴



第４号住居跡　A-A'

1	暗褐色土	7.5YR3/3	粘性、しまりなし。ローム粒子を多量、ロームブロック（φ20 ～ 30mm）を含む。
2	暗褐色土	7.5YR3/3	粘性、しまりなし。ロームブロック（φ10 ～ 30mm）を多量含む。
3	暗褐色土	7.5YR3/3	粘性なし。しまりややあり。ローム粒子を多量含む。
4	暗褐色土	7.5YR3/3	粘性なし、しまりあり。ロームブロック（φ20 ～ 30mm）を多量含む。
5	にぶい黄褐色土	10YR5/3	粘性なし、しまりあり。ロームブロック（φ20 ～ 30mm）を非常に多く含む。住居掘方の充填土。

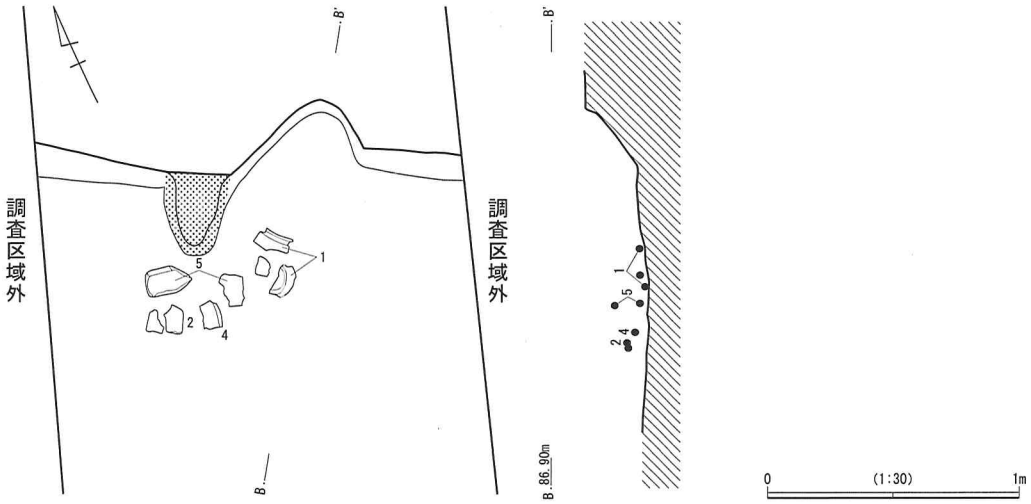
第 10 図　第４号住居跡（SI04）



第４号住居跡カマド　B-B'・C-C'

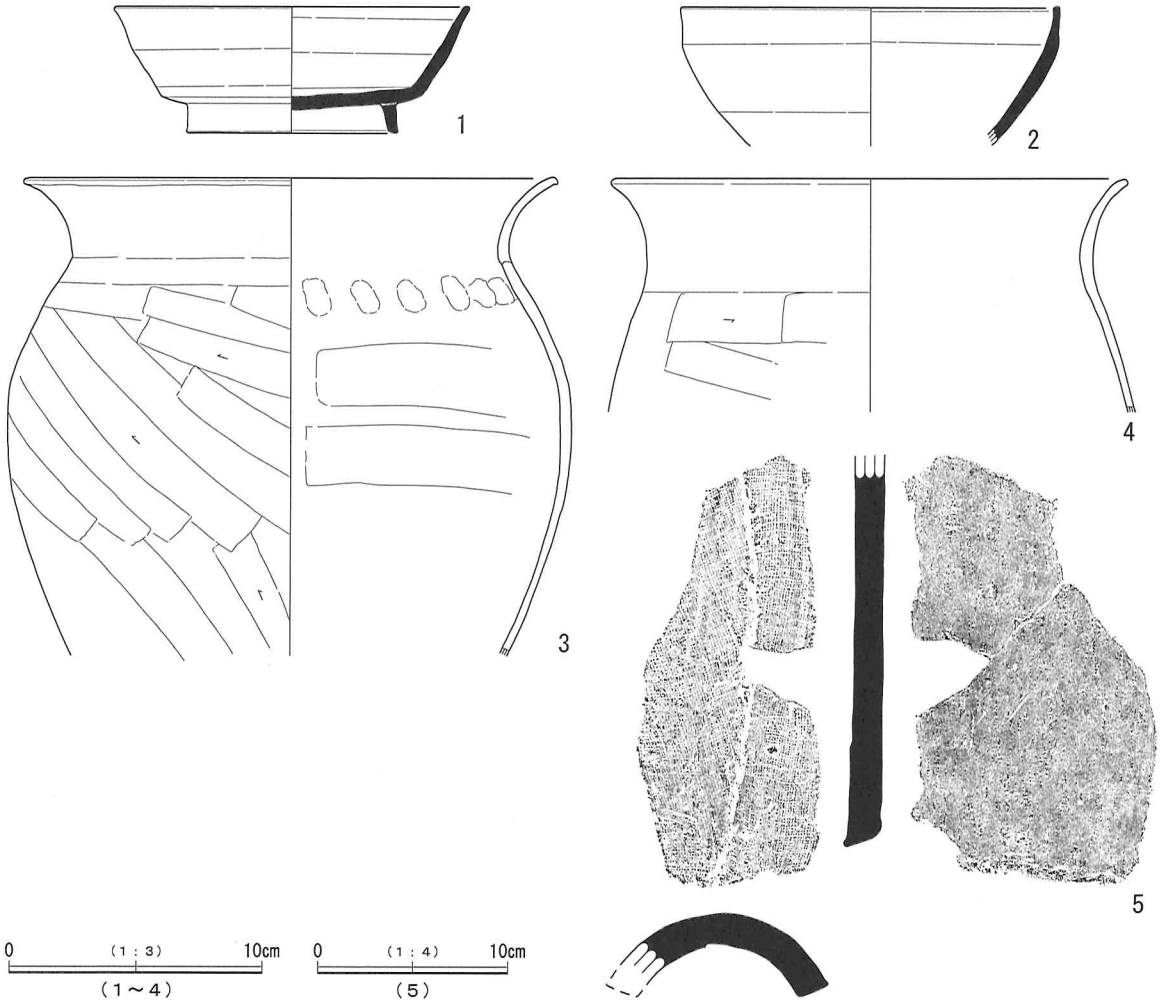
1	暗褐色土	7.5YR3/3	粘性なし、しまりややあり。ロームブロック（φ10～20mm）・粘土ブロック（φ10～20mm）・焼土粒子を多量含む。カマド構築材が崩落したもの。
2	灰褐色土	7.5YR5/2	粘性なし、しまりあり。焼土ブロック（φ10～30mm）を主体とする。カマドの燃焼部下端。
3	黒褐色土	7.5YR3/2	粘性なし、しまりあり。ロームブロック（φ20～30mm）・焼土粒子を多量含む。カマド掘方の充填土。
4	にぶい赤橙色土	10YR6/4	粘性なし、しまりあり。カマド袖が赤化したもの。
5	灰褐色土	7.5YR5/2	粘性ややあり、しまりあり。ローム粒子を少量含む。カマドの袖部。

第 11 図　第４号住居跡袖部



第 12 図　第４号住居跡遺物出土状況

部に焼土の付着が見られる。また５は内側に焼土の付着が見られる。このことから，３はカマドに備え付けられたものであり，５はカマドの心材として用いられたものであろう。９世紀中葉の住居跡である。

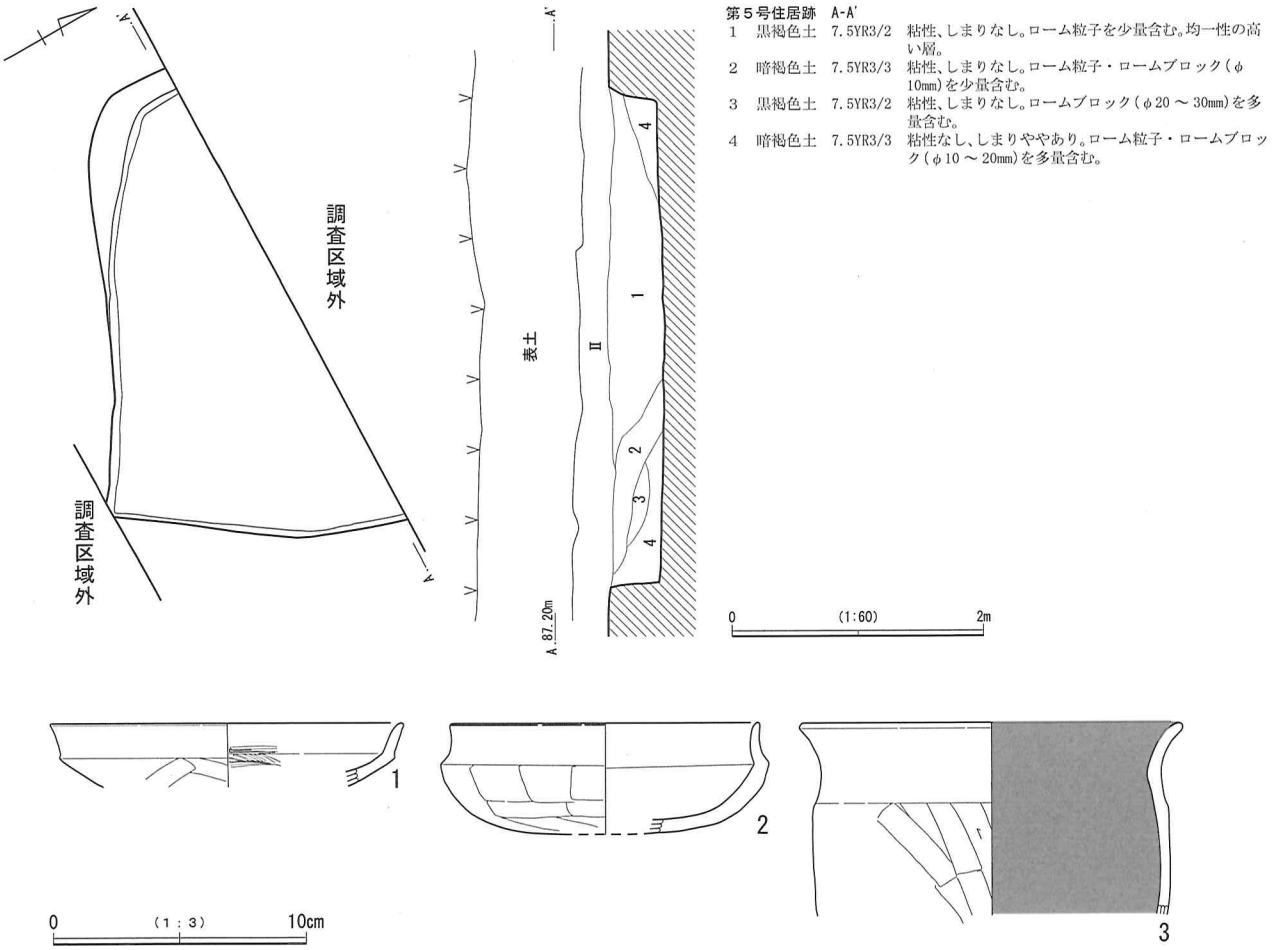


第13図　第4号住居跡出土遺物

第5号住居跡（第14図）

第4調査区東側に位置する。長軸3.7 m以上，短軸2.4 m，深さ0.44 mで主軸方位N－60°－Wである。全体の約半分を調査した。平面は方形を基調とし，南東壁はやや弧を描く。北西隅付近はやや崩れたためか，広がっている。床面は平坦で，壁は北西側を除きほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体的にやや硬化していた。壁は南東側でやや弧を描く。カマドは検出できなかったが，北西壁に付設されたものと思われる。

遺物は何れも覆土中から出土している。古墳時代後期の所産である。



第 14 図　第５号住居跡（SI05）及び出土遺物

２．溝跡（SD）

第１号溝跡（SD - 1）（第 15 図）

第２調査区北西端に位置する。走向方位はＮ－38°－Ｗである。検出された長さは 2.13 m，幅は 0.49～0.56 mで，深さは 0.18 mである。トレンチャーにより攪乱されていたが，溝跡の南東端を検出することができた。端部は丸みを帯び，擂鉢状を呈する

図示するには至らなかったが，平安時代の土師器の甕の胴部破片が１点出土した。

第２号溝跡（SD - 2）（第 16 図）

第２調査区西端に位置する。多くが調査区域外に伸び，東端を検出したに過ぎない。しかもその東端もトレンチャーにより破壊され端部の形状は不明である。走向方位はＮ－87°－Ｅである。検出された長さは 0.64 m，幅 1.23 m，深さは 0.26 mである。底面の幅は 0.16 mと狭いが，溝上端とほぼ平行している。北壁の立ち上がりは緩やかでやや反り気味に立ち上がる。南側は短く直線的に立ち上がったのち，緩やかに立ち上がる。

遺物は出土しなかった。

第３号溝跡（SD - 3）（第 17 図）

第３調査区北側に位置する。今回検出の溝跡の中で幅・深さ共に最大のもので，上幅 2.1 m，深さ 0.70 m を測る。底面は平坦で，壁は直線的に立ち上がったあと，確認面付近でやや外側に広がる。土層の堆積状況

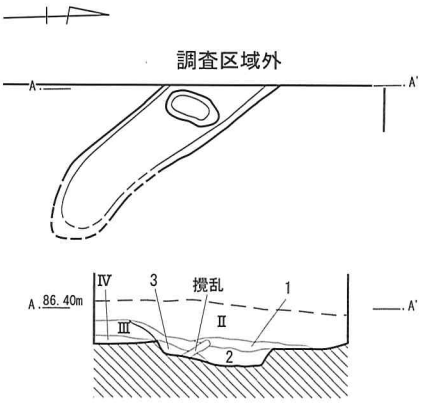
から，数回の掘り直し跡が認められた。

遺物は出土しなかった。

第４号溝跡（SD - 4）（第 18 図）

第３調査区西側に位置している。走向方位はＮ－ 19°－Ｅで上幅 1.0 ｍ，深さ 0.3 ｍを測る。

図示し得なかったが，平安時代の土師器の甕の胴部破片及び底部破片が少量出土した。

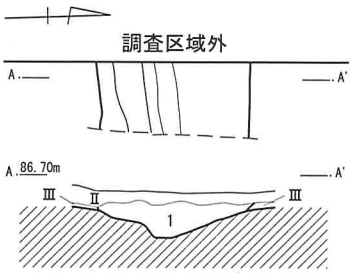


第１号溝跡　A-A'

1	黒褐色土	7.5YR3/1	粘性、しまりややあり。ローム・焼土粒子を多量に含む。
2	黒褐色土	7.5YR3/1	粘性、しまりややあり。ロームブロック（φ20 ～ 30mm）を多量、ローム・焼土粒子を少量含む。
3	褐色土	10YR4/4	粘性なし、しまりあり。リームブロック（φ20 ～ 30mm）・ローム粒子を多量含む。

0　(1:60)　2m

第 15 図　第１号溝跡

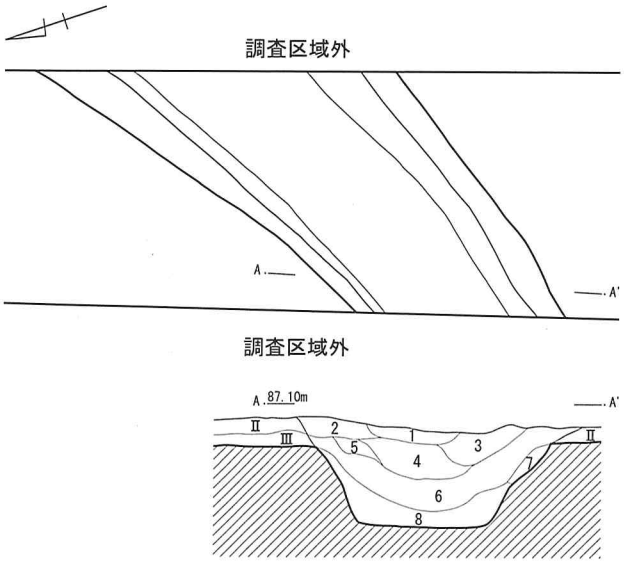


第２号溝跡 A-A'

1	暗褐色土	7.5YR3/3	粘性なし、しまりややあり。ロームブロック（φ30 ～ 50mm）・ローム粒子を多量に含む。

0　(1:60)　2m

第 16 図　第２号溝跡

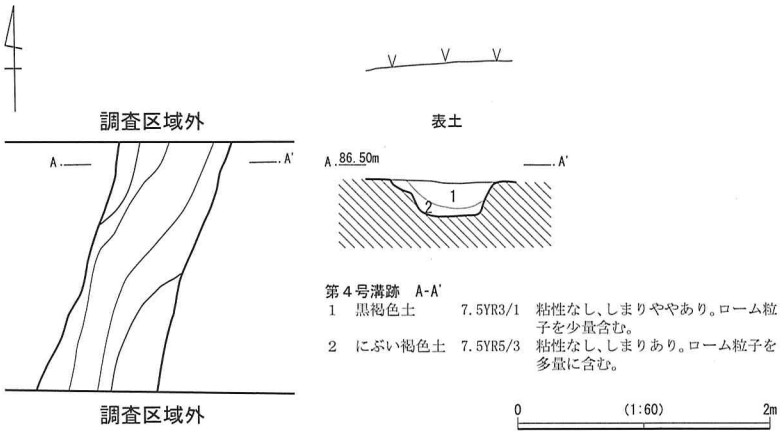


第３号溝跡　A-A'

1	黒褐色土	7.5YR3/2	粘性なし、しまりややあり。ローム粒子を少量含む。
2	暗褐色土	7.5YR3/3	粘性なし、しまりややあり。ローム粒子を含む。
3	暗褐色土	7.5YR3/3	粘性なし、しまりややあり。ローム粒子を含む。ロームブロック（φ10mm）を少量含む。
4	暗褐色土	7.5YR3/3	粘性なし、しまりややあり。ロームブロックを（φ30 ～ 50mm）・ローム粒子を多量含む
5	暗褐色土	7.5YR3/3	粘性なし、しまりややあり。リーム粒子を少量含む。
6	黒褐色土	7.5YR3/2	粘性なし、しまりややあり。ロームブロック（φ10 ～ 20 mm）・ローム粒子を少量含む。
7	黒褐色土	7.5YR3/2	粘性なし、しまりややあり。ロームブロック（φ10 ～ 20mm）を多量含む。
8	暗褐色土	7.5YR3/3	粘性なし、しまりややあり。ロームブロック（φ10 ～ 30mm）・ローム粒子を多量含む。

0　(1:60)　2m

第 17 図　第３号溝跡



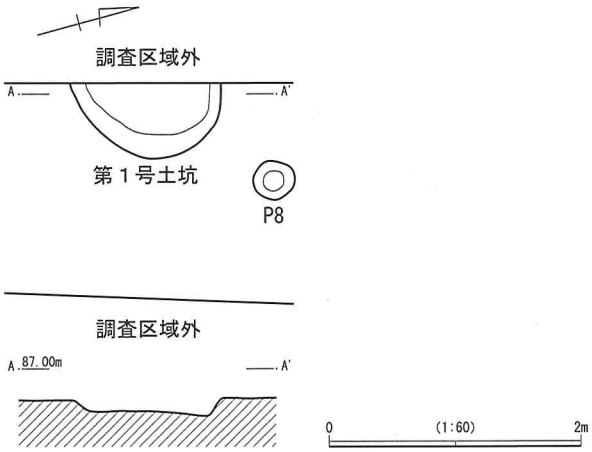
第 18 図　第４号溝跡

３．土坑

第１号土坑（第 19 図）

第３調査区南側に位置する。半分が調査区域外である。平面形態は円形を呈すると思われる。残存長は 1.2 mである。断面は皿状を呈し，平坦な底面から斜めに立ち上がる。

遺物は認められなかった。



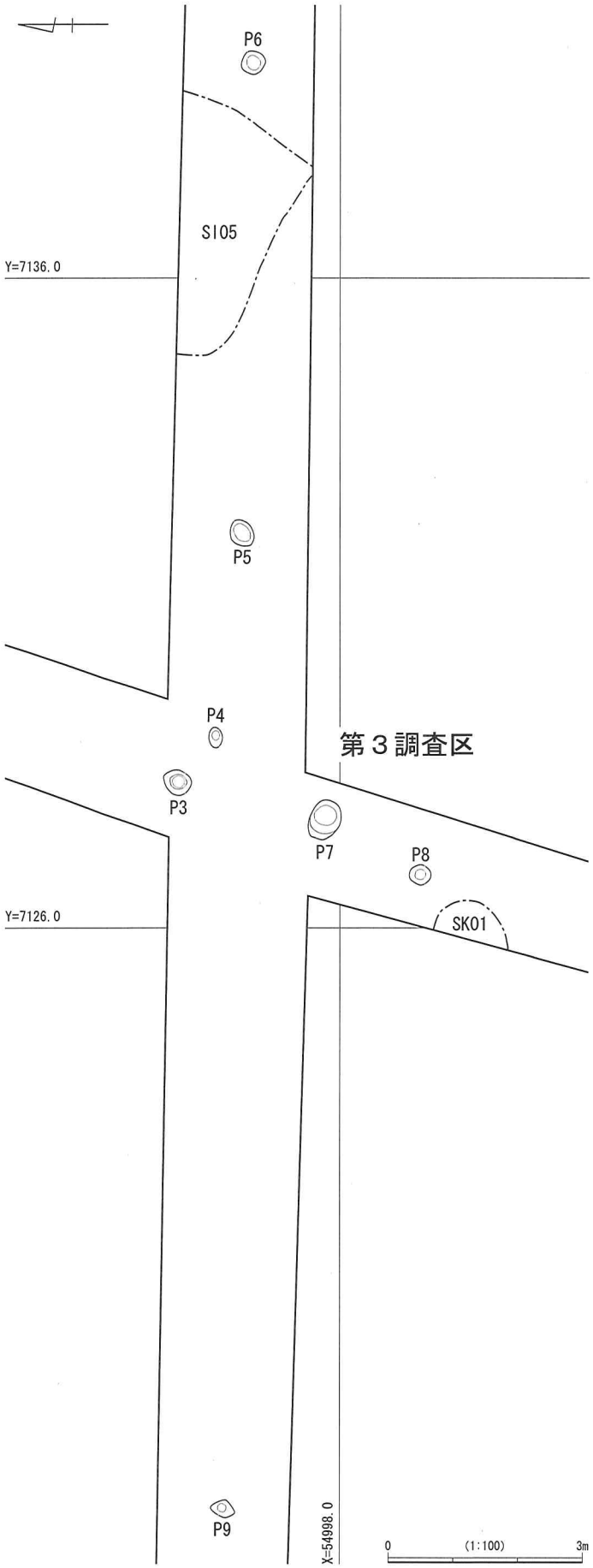
第 19 図　第１号土坑

4．ピット（第20～24図）

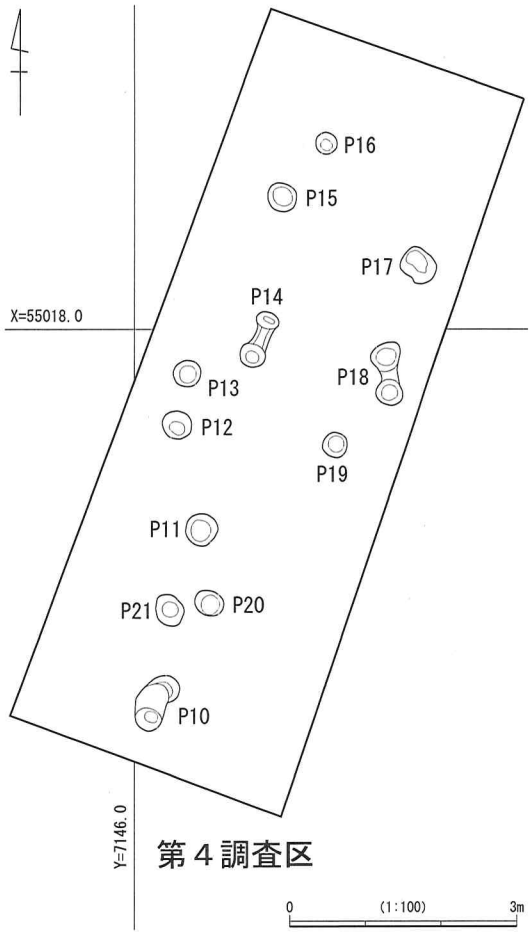
第4調査区でややまとまってピットが検出された。何れも，基本層序の第Ⅱ・Ⅲ層を起源としている。P-10・14・18のように不整形やひょうたん形のものも見られ，柱の抜き取りや立替えをしたものと思われる。柱の根腐れ痕跡は見受けられない。

ピット同士が組み合って掘立柱建物を成すわけでもない。ピット間の距離もまちまちであることから，仮にピット同士が有機的な関係があるとしても，きわめて簡易的な柵列などの構造物であった可能性が高い。

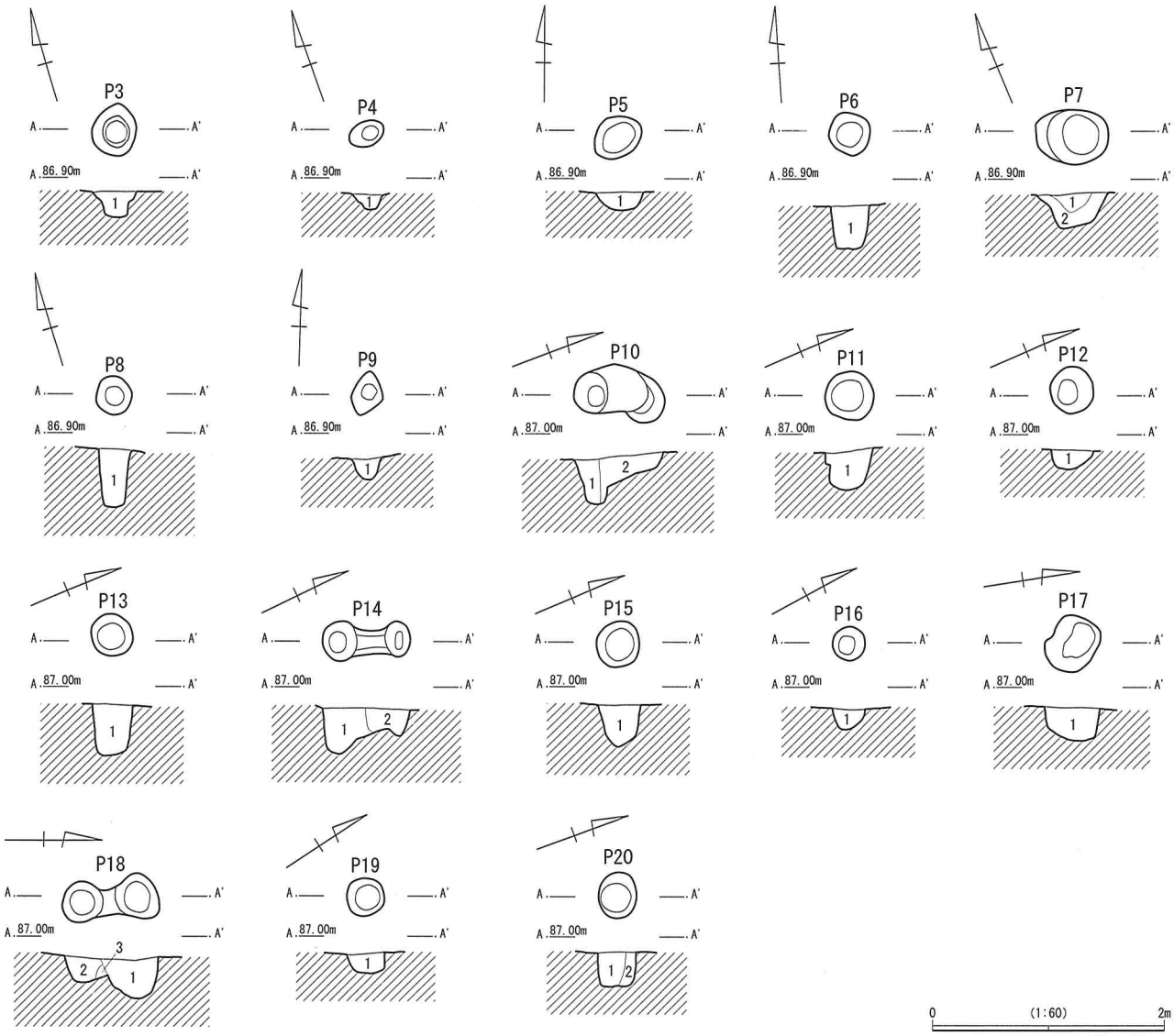
第20図　ピット配置図（第１・２調査区）



第 21 図　ピット配置図（第３調査区）



第 22 図　ピット配置図（第４調査区）



3号ピット
1　暗褐色土　7.5YR3/3　粘性なし、しまりやあり。ロームブロック（φ10mm程）・焼土粒子を少量含む。

4号ピット
1　暗褐色土　7.5YR3/3　粘性なし、しまりややあり。ローム粒子を多量に含む。

5号ピット
1　黒褐色土　7.5YR3/1　粘性、しまりなし。ローム粒子を少量含む。

6号ピット
1　黒褐色土　7.5YR3/1　粘性、しまりなし。ローム粒子・焼土粒子を少量含む。

7号ピット
1　暗褐色土　7.5YR3/3　粘性、しまりなし。ローム粒子を多量に含む。
2

8号ピット
1　暗褐色土　7.5YR3/3　粘性、しまりなし。ロームブロック（φ10mm程）・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。

9号ピット
1　黒褐色土　7.5YR3/2　粘性、しまりなし。ロームブロック（φ10～20mm）を多量に含む。

10号ピット
1　黒褐色土　7.5YR2/2　粘性、しまりなし。ローム粒子を微量含む。
2　黒褐色土　7.5YR3/2　粘性あり。しまりなし。ローム粒子を少量含む。

11号ピット
1　黒褐色土　7.5YR2/2　粘性あり、しまりなし。ローム粒子を少量含む。

12号ピット
1　黒褐色土　7.5YR2/2　ローム粒子を微量含む。

13号ピット
1　黒褐色土　7.5YR2/2　粘性、しまりなし。ローム粒子を多量に含む。

14号ピット
1　黒褐色土　7.5YR3/2　粘性あり、しまりなし。ローム粒子を少量含む。
2　黒褐色土　7.5YR3/2　粘性あり、しまりなし。ローム粒子を多量に含む。

15号ピット
1　黒褐色土　7.5YR3/2　粘性あり、しまりなし。ローム粒子を少量含む。

16号ピット
1　黒褐色土　7.5YR3/2　粘性あり、しまりなし。ローム粒子を少量含む。

17号ピット
1　黒褐色土　7.5YR3/2　粘性あり、しまりなし。ローム粒子を斑状に多量に含む。

18号ピット
1　黒褐色土　7.5YR2/2　粘性、しまりなし。ローム粒子を微量含む。
2　黒褐色土　7.5YR2/2　粘性あり、しまりなし。ローム粒子を微量含む。
3　明黄褐色　7.5YR3/2　粘性あり、しまりなし。ローム粒子を少量含む。

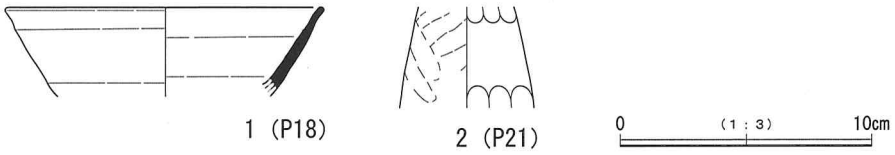
19号ピット
1　黒褐色土　7.5YR2/2　粘性、しまりなし。ローム粒子を少量含む。

20号ピット
1　黒褐色土　7.5YR3/2　粘性あり、しまりなし。ローム粒子を少量含む。
2　黒褐色土　7.5YR3/2　粘性あり、しまりなし。ローム粒子を多量含む。

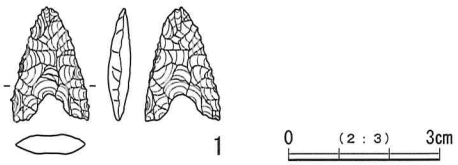
第23図　ピット

第１表　ピット計測表［cm］

遺構名	地点	平面形	長軸方位	長径	短径	深さ	備考	遺構名	地点	平面形	長軸方位	長径	短径	深さ	備考
P1	第１調査区	楕円形	N－22°－W	79.9	52.7	8.9		P12	第４調査区	円形		40.5		17.1	
P2	第２調査区	楕円形？	不明	(64.0)	不明	10.5		P13	第４調査区	円形		37.1		44.8	
P3	第３調査区	円形		45.4		22.7		P14	第４調査区	不整形	N－23°－E	76.1	34.2	39.3	
P4	第３調査区	楕円形	N－84°－E	31.6	21.5	13.8		P15	第４調査区	円形		40.9		36.2	
P5	第３調査区	楕円形	N－56°－E	44.7	35.3	16.0		P16	第４調査区	円形		29.2		18.6	
P6	第３調査区	円形		38.3		38.2		P17	第４調査区	不整形	N－43°－W	49.5	39.5	29.5	
P7	第３調査区	楕円形	N－52°－W	63.6	46.7	31.3		P18	第４調査区	不整形	N－7°－W	82.5	39.6	37.0	
P8	第３調査区	円形		33.4		50.6		P19	第４調査区	円形		33.9		18.5	
P9	第３調査区	不整形	N－13°－E	38.6	26.6	19.7		P20	第４調査区	楕円形	N－61°－W	39.8	32.1	29.9	
P10	第４調査区	不整形	N－35°－E	78.6	39.4	45.2		P21	第４調査区	楕円形	N－34°－W	44.6	36.0	58.5	
P11	第４調査区	円形		43.4		36.7									



第 24 図　ピット出土遺物



第 25 図　遺構外出土遺物

第２表　出土遺物観察表

第１号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置
1	須恵器	坏	－	〔2.5〕	(8.6)	白色粒子・黒色粒子・小礫	暗オリーブ灰色（5GY4/1）	良好	内外面ロクロナデ，底部外面ヘラケズリ。益子産。	覆土
2	須恵器	坏	(14.0)	3.8	(7.8)	白色粒子・黒色粒子・小礫	灰白色（7.5Y7/1）	良好	内外面ロクロナデ，ロクロ目は目立たない。底部回転糸切り痕を残す。外面底部及び底部～胴中位かけて煤が付着。口唇部は剥落，磨滅する。三彩産。	覆土

第２号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置
1	土師器	皿	(17.4)	〔2.3〕	(16.0)	黒色粒子・長石・砂粒	外：にぶい黄橙色（10YR7/4） 内：にぶい黄褐色（10YR5/4）	良好	内面及び口縁部外面横ナデ，口縁部と底部は稜を持ち，底部外面はヘラケズリされる。	覆土
2	土師器	坏	(15.6)	5.3	(14.1)	白色粒子・赤色粒子・小礫	にぶい黄橙色（10YR7/4）	良好	内面及び口縁部外面強い横ナデ。口縁部と底部は明瞭の稜を持つ。底部は中心部ヘラケズリ後周辺部横ケズリ。	床面
3	土師器	坏	(11.6)	3.9	(12.2)	黒色粒子・赤色粒子・砂粒	外：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内：黒褐色（7.5YR3/1）	良好	内面横ナデ後，棒状工具により，ランダムにミガキ。底部外面中心部ヘラケズリ後，周辺部横ケズリ。内面黒色処理。胎土緻密。	貯蔵穴覆土

第３号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置
1	土師器	坏	(16.6)	〔3.6〕	(16.6)	黒色粒子・赤色粒子・砂粒	にぶい黄橙色（10YR6/4）	良好	内面及び口縁部外面横ナデ。底部から口縁部への移行は滑らかである。底部外面は，被熱により剥落している。	覆土
2	土師器	鉢	(12.8)	〔5.5〕	－	白色粒子・赤色粒子・砂粒	灰黄褐色（10YR5/2）	良好	内面及び口縁部外面横ナデ。胴部外面ケズリ。廃棄後，被熱により赤化した部分がある。	覆土
3	土師器	甕	(23.6)	〔5.0〕	－	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・長石・小礫	にぶい黄橙色（10YR7/4）	良好	口縁部内外面横ナデ。胴部外面縦ケズリ。	覆土
4	土師器	坏	(12.6)	4.0	13.8	黒色粒子・砂粒	浅黄色（2.5YR7/4）	良好	内面黒色処理されるが，被熱により剥落。外面口縁部横ナデ。底部は中心部ケズリ後，周辺部横ケズリ。全体的に磨滅している。	カマド左袖内
5	土師器	坏	(11.6)	〔2.7〕	(10.2)	黒色粒子・赤色粒子・小礫	にぶい黄橙色（10YR7/4）	良好	口縁部内外面横ナデ。胴部周辺部ケズリ。	覆土
6	土師器	甕	－	〔5.1〕	(9.0)	白色粒子・赤色粒子・長石・小礫	外：黄橙色（10YR5/8） 内：にぶい黄橙色（10YR6/3）	良好	外面胴部下端横ケズリ。底部外面ケズリ，木葉痕を残す。内面横ナデ。底部内面黒色化。	カマド右床面

第４号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置
1	須恵器	高台付坏	14.0	5.0	8.6	白色粒子・黒色粒子・砂粒	灰色（7.5Y5/1）	良好	内外面ロクロナデ。底部は糸切り痕を残す。内面非常に平滑である。宇都宮産	カマド周辺床面
2	須恵器	鉢	(15.0)	〔5.5〕	－	白色粒子・黒色粒子・砂粒	灰色（7.5Y6/1）	良好	鉄鉢模倣。内外面ロクロナデ，ロクロ目不明瞭。内面煤付着。宇都宮産	カマド周辺床面
3	土師器	甕	(21.0)	〔18.9〕	－	白色粒子・長石・砂粒	にぶい赤褐色（2.5Y4/4）	良好	口縁部内外面強い横ナデ。外面胴部最大径以上斜位のケズリ，胴部下半縦ケズリ。器壁非常に薄い。	カマド周辺床面
4	土師器	甕	(20.4)	〔9.2〕	－	白色粒子・赤色粒子・長石・砂粒	にぶい赤褐色（2.5Y4/3）	良好	口縁部内外面横ナデ。胴部上半斜位のケズリ後，胴部最上位横ケズリ。	カマド周辺床面

番号	種別	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置
5	須恵質	丸瓦	〔15.6〕	(11.7)	1.6	白色粒子・黒色粒子・長石・石英・小礫	灰白色（5Y7/1）	良好	外面長軸方向ヘナデ。端部付近は，短軸方向ヘナデ。内面布目痕を残す。内面に焼土の付着が見られる。	カマド周辺床面

第５号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置
1	土師器	坏	(14.0)	〔2.5〕	(13.4)	白色粒子・赤色粒子・長石・石英	灰黄褐色（10YR6/2）	良好	口縁部内外面強い横ナデ。底部外面周辺部ヘラケズリ。焼成時の黒斑が残る。	覆土
2	土師器	坏	(12.2)	〔4.4〕	(13.0)	白色粒子・砂粒	にぶい黄橙（10YR6/3）	良好	口縁部内外面強い横ナデ。底部外面周辺部ヘラケズリ後，最上部を横ケズリ。口縁部と底部との境に明瞭な稜を持つ。胎土緻密。	覆土
3	土師器	甕	(15.0)	〔7.6〕	－	白色粒子・黒色粒子・砂粒	外：浅黄色（2.5Y7/4） 内：褐灰色（10YR4/1）	良好	外面胴部，斜位に下から上へケズリ後，口縁部内外面横ナデ。胎土緻密。	覆土

その他の遺構出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置
1	須恵器	坏	(12.6)	〔3.5〕	－	白色粒子・黒色粒子	灰色（N6/）	良好	内外面ロクロナデ。宇都宮産。	P18 覆土
2	土師器	高坏	－	〔3.9〕	－	黒色粒子・砂粒	黄橙色（10YR8/6）	良好	高坏脚部，中実で外面は縦ナデが施される。胎土は非常に緻密である。	P21 覆土

遺構外出土遺物観察表

番号	種別	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	手法の特徴	出土位置
1	石鏃	石鏃	22.5	14	4	チャート。凹基石鏃	SI-5 覆土

4　まとめ

今回の調査で古墳時代後期の住居跡が３軒，平安時代の住居跡が２軒見つかっている。

古墳時代後期の住居はそのなかでも後半に位置づけられ，７世紀初頭のものであろう。

平安時代の住居跡は第１号住居跡が９世紀後半，第４号住居跡が９世紀中頃と若干時期を異にする。いずれもカマドを有する時期の住居跡である。カマドを確認できた住居跡は３軒に過ぎないが，全ての住居跡が概ね北壁にカマドが付設されたものと考えられる。

周辺の調査区でも古墳時代後期から平安時代のかけての遺構が見つかっている。

本調査区の北東に位置する地点（平成19年度調査地点，以下19年度調査地点）では古墳時代及び平安時代の住居跡が見つかっている（今平・三輪 2014）。古墳時代の住居跡を概観すると，平面形態は東西に長い長方形を呈する。カマドが見つかっている住居跡ではSI－11以外は，北壁にカマドが付設されている。また，カマドは中央からやや東側に寄った場所に築かれている。

同じく北東側で19年度調査地点の南側に位置するＥ区では，古墳時代の竪穴住居跡10軒，奈良時代と平安時代の住居跡が11軒調査されている（白﨑 2010）。また，これに伴って，掘立柱建物跡も見つかっている。Ｅ区も他の地区と同様に古墳時代から平安時代の多時期にわたるが，概ねカマドの方位は北を志向している。カマドの付設位置は北壁中央部分とやや東側に寄ったものの２種類がある。住居形態は，一辺が７～7.5ｍ前後のものが方形で，４～５ｍ前後のものが長方形を呈していて，面積と平面形に相関関係が見られる。また，SI－13のように間仕切りをもつやや大形の住居跡が見つかっており，カマドの対面に張り出し部は伴わないが，ピットを持つ。

本調査南側のＦ区では，古墳時代６世紀後半の住居跡が２軒検出されている。19年度調査地点・Ｅ区及び本調査地点と同様に，北側にカマドが付設されたと思われる。平面形態は正方形に近く，カマドの対面には，張り出し部があり，貯蔵穴を伴う。両地点の住居には若干時間差があるが，地点により同じ古墳時代後期でもその住居形態に違いが見られる。本調査地点では第２号住居跡が全形は不明であるが，カマドが北東

隅に寄っていることから，19年度調査地点の住居跡に近い。一方第3号住居跡は東西の壁は不明確であるが，Ｆ区の住居形態に近い。南壁は調査区外であるため，張り出し部を持つかは不明である。第5号住居跡は，南壁のみだが，張り出し部を持たないことから，第2号住居跡に近い形態をとると思われる。

調査面積の制約はあるが，地点により住居形態に違いが見られ，その中間にあたる本調査地点では両者が見られた。このことは，本地点付近で若干に分布の重複が見られるが，概ね地点により住居形態に違いが見られる可能性が指摘できる。また，Ｅ区が大形住居や掘立柱建物跡など他の地区に見られない遺構が検出されていることから集落の中心地区と思われる。

平安時代の第4号住居跡からは，武蔵型甕が出土している（第13図3）。Ｅ区でも武蔵型甕を主体とする住居跡が見つかっている。また，西刑部西原遺跡では，とちぎ生涯学習文化財団が調査した地点で南比企産の須恵器の皿が出土している（植木2010）。本調査地点の武蔵型甕が搬入品か否かは置くとしても，南比企産の須恵器と合わせて，広範な地域との交流をうかがわせる資料として注目できる。

参考文献

植木茂雄　2010　『西刑部西原遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第329集　栃木県教育委員会　（財）とちぎ生涯学習文化財団

内山敏行ほか　2010　『東谷・中島地区遺跡群10　権現山遺跡北部（２～４区・ＳＧ１区）・杉村（ＧＮ１区）』栃木県教育委員会　（財）とちぎ生涯学習文化財団

今平利幸・三輪孝幸　2014　『西刑部西原遺跡　Ｆ区』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第86集　宇都宮市教育委員会

白﨑智隆　2010　『西刑部西原遺跡　Ｅ区』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第76集　宇都宮市教育委員会

初山孝行ほか　1999　『東谷・中島地区遺跡群№1　磯岡遺跡（Ｉ区）』栃木県教育委員会　（財）栃木県文化振興事業団

土生朗治ほか　2007　『西刑部西原遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第59集　宇都宮市教育委員会

藤田典夫・安藤美保　2000　『杉村・磯岡・磯岡北』栃木県埋蔵文化財調査報告第241集　栃木県教育委員会　（財）栃木県文化財振興事業団

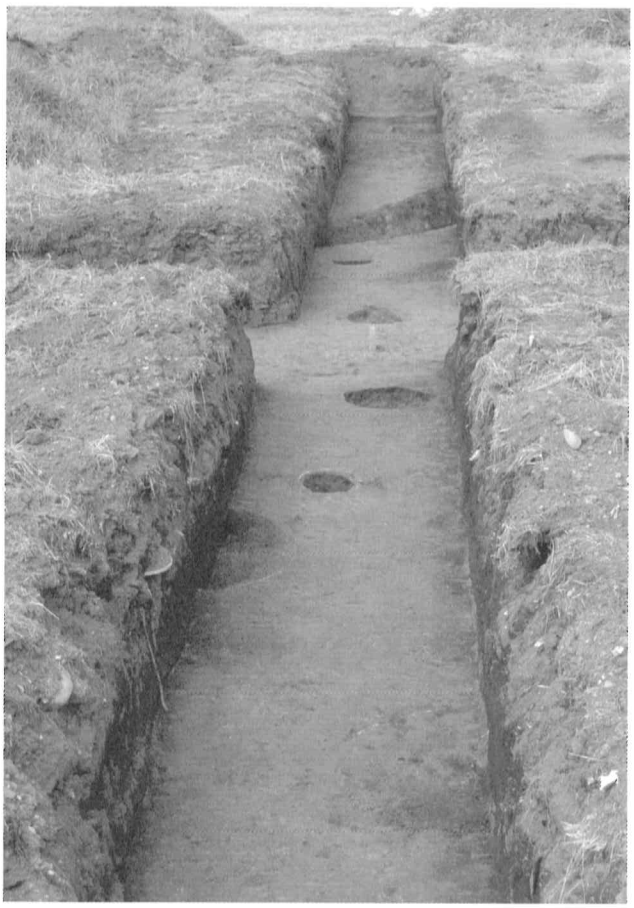
谷中隆ほか　2001　『権現山遺跡・百目鬼遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第257集　栃木県教育委員会　（財）とちぎ生涯学習文化財団

写 真 図 版

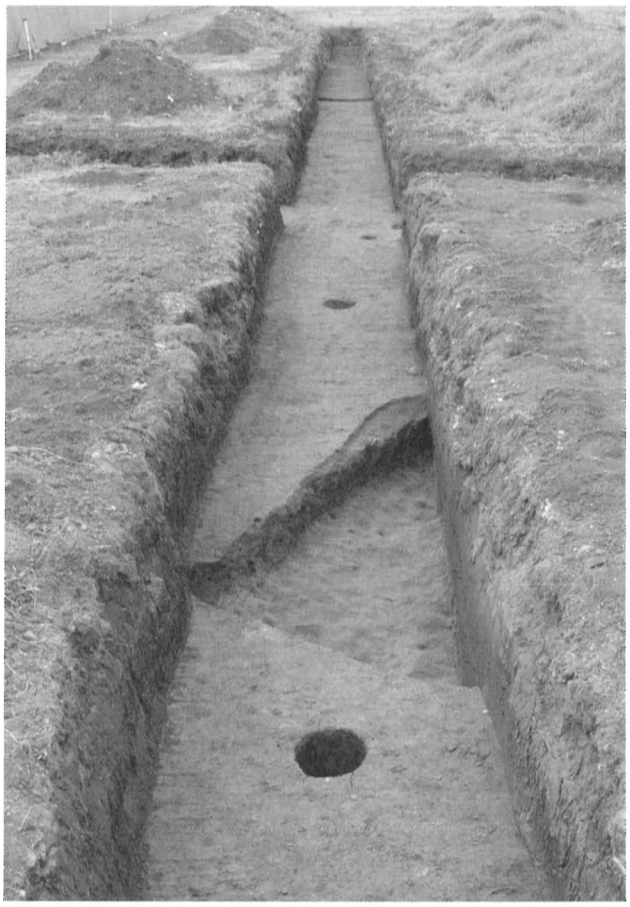
第１調査区全景（南より）

第２調査区全景（南より）

図版２



第３調査区南北トレンチ全景（南より）

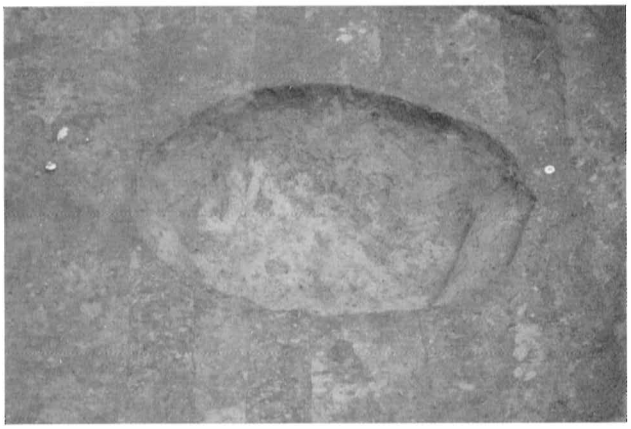


第３調査区東西トレンチ全景（東より）

第４調査区全景（南より）

SI01 全景（南より）

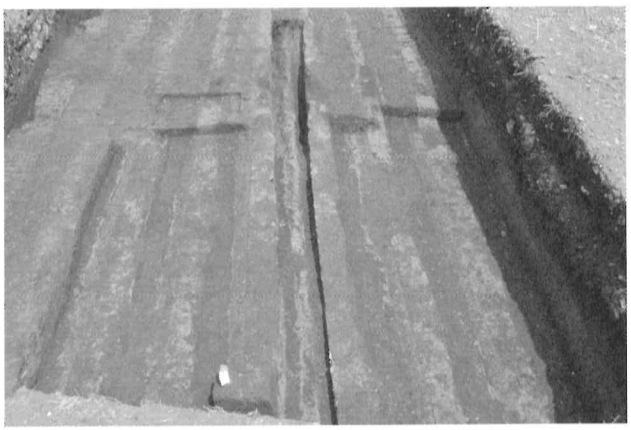
SI02 全景（南東より）



SI02 貯蔵穴完掘（南より）

SI02 貯蔵穴遺物出土状況（南より）

SI02 貯蔵穴遺物出土状況（南より）



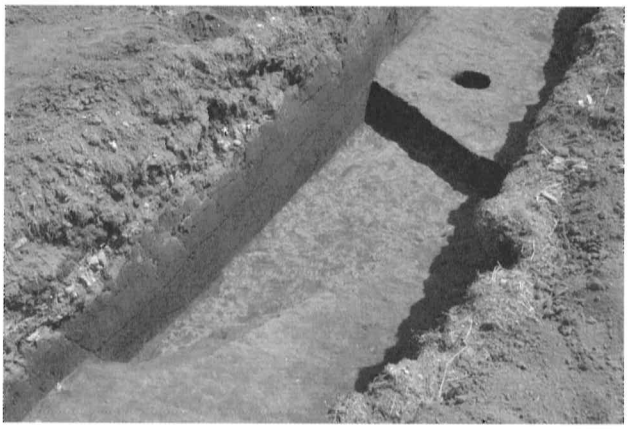
SI03 全景（南より）

SI03 カマド左袖出土土器（南より）

SI04 全景（南より）

図版４

SI04 遺物出土状況（南より）



SI05 全景（西より）

SD01 完掘（南東より）

SD02 全景（東より）

SD03 全景（東より）

SD04 全景（南より）

SI01　No. 2

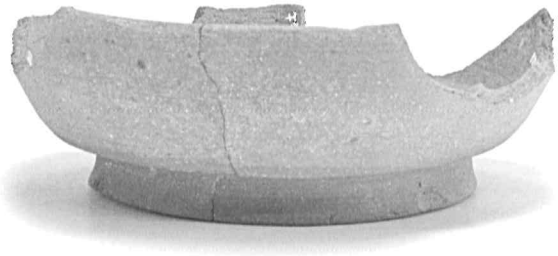
SI02　No. 2

SI02　No. 3

SI03　No. 4

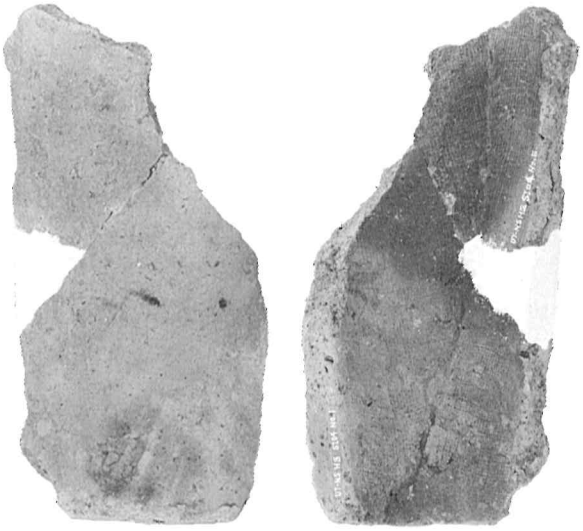
SI03　No. 6

SI04　No. 3

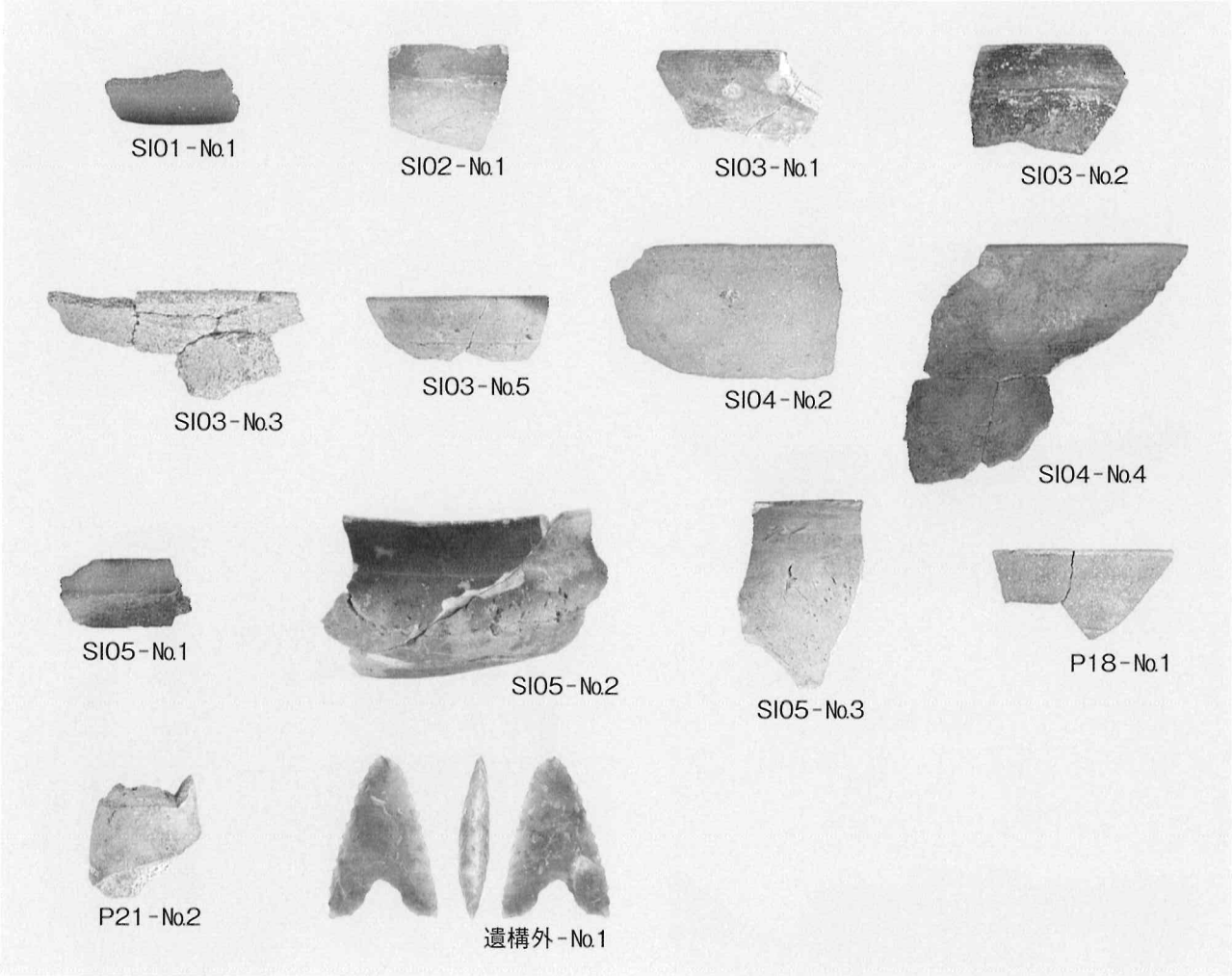


SI04　No. 1

図版６



SI04　No. 5


SI01-No.1
SI02-No.1
SI03-No.1
SI03-No.2
SI03-No.3
SI03-No.5
SI04-No.2
SI04-No.4
SI05-No.1
SI05-No.2
SI05-No.3
P18-No.1
P21-No.2
遺構外-No.1

報告書抄録

ふりがな	にしおさかべにしはらいせき　えいちく
書名	西刑部西原遺跡　H区
副書名	
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第88集
編著者名	宅間清公
編集機関	㈱東京航業研究所　〒350-0855　埼玉県川越市伊佐沼28番1　TEL　049-229-5771
発行機関	宇都宮市教育委員会　〒320-8540　栃木県宇都宮市旭1-1-5　TEL　028-632-2764
発行年月日	西暦2014年11月30日（平成26年11月30日）

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
西刑部西原遺跡（にしおさかべにしはらいせき）	栃木県宇都宮市（とちぎけんうつのみやし） インターパーク 4丁目（ちょうめ）2-6	09201	43540	36° 29′ 45″	139° 54′ 46″	2014.08.05 ～ 2014.08.25	275㎡	店舗建設に伴う事前調査

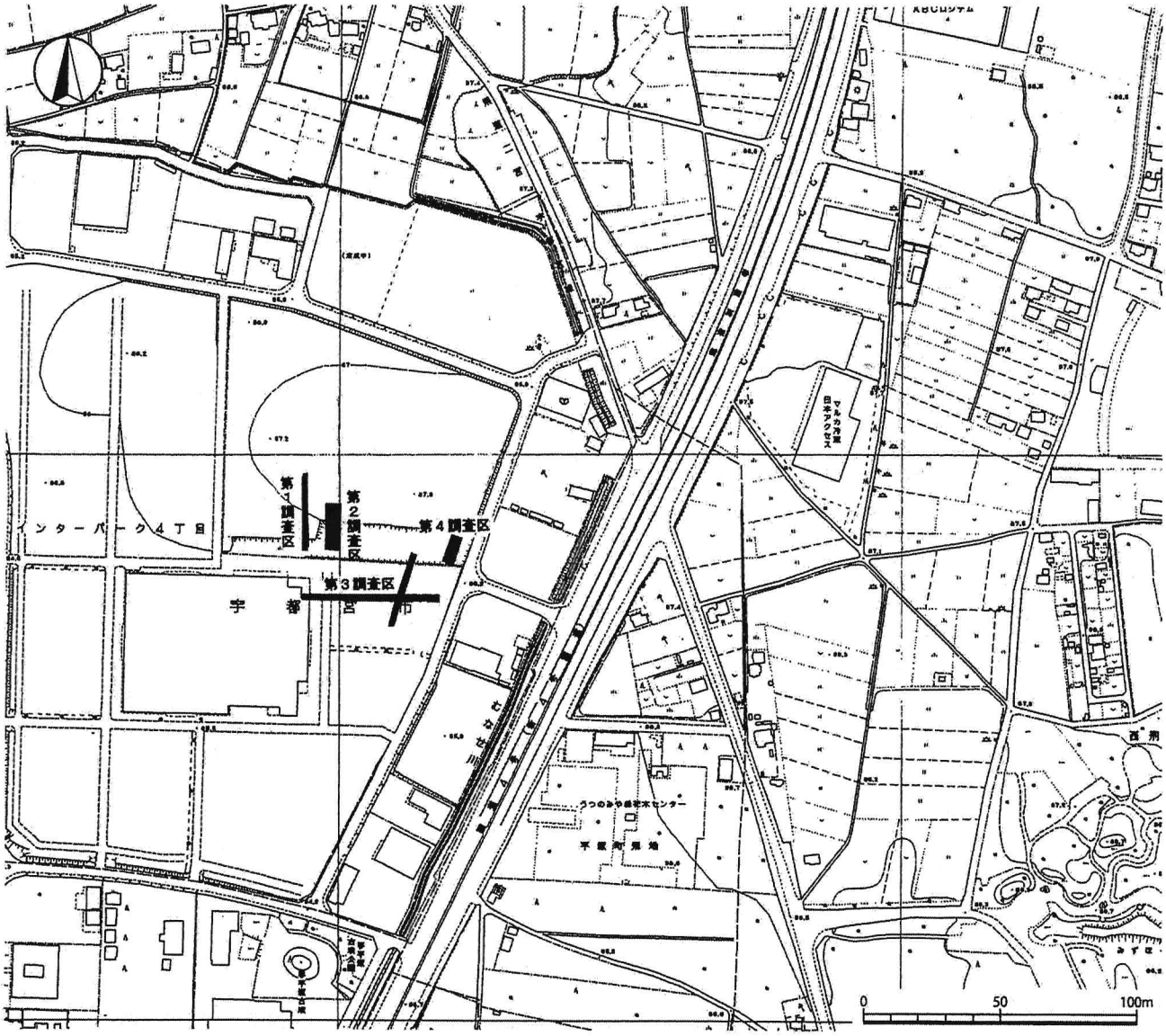
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西刑部西原遺跡	集落跡	古墳時代後期	住居跡　3軒	土師器	カマド
		平安時代	住居跡　2軒 溝跡　4条 土坑　1基 ピット　21基	土師器　須恵器	
要約	古墳時代後期及び9C中葉～後の住居跡が検出された。時代を異にするが、北側にカマドが付設されている。平安時代の住居から出土した須恵器は近郊の複数の産地からもたらされている。				

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書　第88集

西刑部西原遺跡（H区）

発行日　2014（平成26）年11月
編　集　株式会社東京航業研究所
〒350-0855　埼玉県川越市伊佐沼28番1
TEL　049-229-5771
発　行　宇都宮市教育委員会
〒320-8540　栃木県宇都宮市旭1-1-5
TEL　028-632-2764
印　刷　関東図書株式会社
〒336-0021　埼玉県さいたま市南区別所3-1-10
TEL　048-862-2901

西刑部西原遺跡（H地区）　　２頁訂正



第１図　本調査範囲と周辺の地形